

Vol. **190** 2024.秋

木

MOKUME

特集

《第27回》

作文コンクール表彰式

連載

【がんばる企業訪問記】

ヤベホーム株式会社

静かにまゆく日差しを
実りに変えろ。



一般社団法人

日本木造住宅産業協会

CONTENTS

木 芽 Vol.190

秋号
令和6年(2024年)
11月20日発行

書家・文字文化文筆家 宇佐美 志都



	折々のひとひら	1
特集	第27回 作文コンクール 表彰式	2
木住協NOW	「2023年度(令和5年度)木住協自主統計および着工統計の分析報告書」概要報告	13
	日本木造住宅産業協会 住まいのトレンドセミナー	15
	優秀な技能・技術を持ち後進への指導・育成などで木住協推薦の大工技能者3人が国交大臣から「建設マスター」に顕彰	17
連載	会員会社ニュースがんばる企業訪問記／ヤベホーム株式会社(長崎県)	19
木住協NOW	「木造ハウジングコーディネーター資格試験講習会」を実施	23
	支部との連携強化を目指した情報交換会を実施	24
	「商談に使えるスピードスケッチセミナー」【会員限定】無料受付中	25
	資材・流通委員会が見学会を開催	27
連載	日本の名城 天守閣ものがたり／松本城(長野県)	29
連載	税務談話室／令和7年度住宅に関連する税制改正	31
木住協NOW	市川会長・支部長懇談会 開催	33
	木住協が初主催！「登録建築大工基幹技能者講習」を開催	34
支部だより	研修見学会(中国支部)	35
	支部長就任のご挨拶(近畿支部)	37
	資材・技術委員会主催 伝統的建築物の研修見学開催(近畿支部)	38
	2024年度「第1回商品・技術勉強会」開催レポート(中部支部)	41
	2024年度「視察研修旅行」開催レポート1日目(中部支部)	42
木住協NOW	新規会員紹介	44
連載	木の匠 Historia／東山手十二番館(長崎県長崎市)	45

『廻』・・・囲まれた中でも、回る水

秋が、今年も実っている。四季が廻り、人も廻る。

「輪廻」という言葉の響きや概念的なものは、もはや、その起源の背景の範疇を超え浸透しているのではないかと。一方「一期一会」という、一回性を説き表してくれるものもある。今、この時の一度の出会い、しかし、人生は回る、廻ると、信じられるからこそ、救われる時もある。

ことわざ・慣用句の豊富さにありがたさを感じる。知識や智慧は、自らを救う。自らを救うことができれば、周囲も救える。そして、私たちは、秋空を見上げた時に、夏が終わったことを知り、そして、深みゆく秋にそこから浸ることもできる。区切りをつけ、そして、次の扉が続いていることを知る。

漢字『廻』の、えんによりは、儀礼の場所や、その建造物を示す。その場所は、神聖で、廻は、その行動を示す、動詞的な意味。『回』は、水が回流する象形から成る。囲まれた中でも、その中で、流れをつくりだし、動きを見出していけるのは、人に重なる。私たちは、ものやことに、自分の解釈を加え、自らを肯定させる理由としたがる時もある。そして、それを言葉に託す。

季節が廻るように、自分の心も廻るのが、人間なのだろうと、秋にまた思う。

第27回

木のある暮らし

脱炭素社会
SDGsの実現を
考えるきっかけに!

作文コンクール

表彰式を開催



一般社団法人 日本木造住宅産業協会(市川晃会長)は、毎年恒例の「木のある暮らし」作文コンクールの表彰式を10月26日(土)、東京・水道橋にある住宅金融支援機構の「すまい・ホール」にて執り行いました。受賞者がリモートではなく会場に集まった開催は5年ぶりのことです。

小学校の児童を対象に、身近にある木のことについての作文を募る本コンクールも今年で27回目を迎え、国内549校に加え、特別支援学校8校、海外からも7カ国15校からの応募があり、合計3,826点の作品が寄せられました。この中から厳正な審査を経て国土交通大臣賞、文部科学大臣賞、農林水産大臣賞、環境大臣賞、外務大臣賞の各大臣賞をはじめとする入賞18作品、木住協ブロック賞20作品、佳作24作品、特別賞13作品、および最優秀団体賞1校と優秀団体賞4校が決定しました。

表彰式では、受賞した児童やご家族の方々、来賓として国土交通省 住宅局 住宅生産課長 松野秀生氏、農林水産省 林野庁 林政部 木材産業課 木材製品技術室長 武藤信之氏、独立行政法人 住宅金融支援機構 理事長 毛利信二氏が出席され、審査員としてイラストレーターのはせがわゆうじ氏を含む6名の方々が出席しました。



市川会長による開会挨拶

「木のあるくらし」作文コンクールは、木造住宅や木材の計画的な利用が地球環境に与える好影響を訴えるとともに、日本の住文化の原点ともいえる木造住宅の素晴らしさを知っていただくため、平成10年から国土交通省が主唱する10月の住生活月間の関連行事の一環として木住協が主催しています(主催:一般社団法人日本木造住宅産業協会、後援:国土交通省・文部科学省・農林水産省・環境省・外務省・独立行政法人住宅金融支援機構・株式会社朝日学生新聞社)。

今年度の作文コンクールは、2024年5月15日、木住協のホームページに開催内容を掲載したことを皮切りに、全国の小学校や海外の日本人学校などに告知ポスターやお知らせを配布し、その後、開催告知広告を朝日小学生新聞ほか全国で展開しました。さらに、木住協では各支部や会員企業の事務所、モデルハウスなどに告知ポスターを貼り出すなど、積極的な告知活動を展開し、9月6日に応募を締め切らせていただきました。



日本国内549校、 海外7カ国15校が応募 6名の審査員が 厳正な審査を実施

今年も、国内外の小学校から個性的で創造性の高い作

品が多数寄せられ、その作品数は高学年の部(小学4年生から6年生)で2,561作品、低学年の部(小学1年生から3年生)で1,265作品、合計3,826作品にのびりました。応募校数は国内549校のほかに、特別支援学校8校(13作品)、海外からは中国、ドイツ、インドネシア、ネパール、ニュージーランド、シンガポール、アメリカの7カ国15校(66作品)から応募をいただきました。

審査は低学年と高学年の部に分けた厳正な事前審査を経て、10月2日に審査員による最終審査を行いました。審査員はイラストレーターのはせがわゆうじ氏を審査員長に、南雲国語教室主宰 南雲ゆりか氏、国土交通省 住宅局 住宅生産課 木造住宅振興室長 中澤篤志氏、独立行政法人 住宅金融支援機構 マンション・まちづくり支援部 技術統括室長 相原康生氏、株式会社 朝日学生新聞社 取締役営業担当兼大阪支社長 櫻木範行氏、木住協専務理事 加藤永氏の6名で構成されました。審査は、①「木のあるくらし」というテーマに沿っていること、②具体的で分かりやすいこと、③発想が自由で豊かであること、④表現力がユニークであること、⑤本人の考え方が良く伝わることなどを基準に、厳正に選考しました。



主催者代表の挨拶と 来賓代表の祝辞

表彰式の冒頭では、木住協が毎年10月18日を「木造住宅の日」に定めている由来について、司会者から木という字が数字の『十』と『八』が組み合わされていること、数字の『十』は住まいの『住』にも通じることなどを説明。独立行政法人 住宅金融支援機構との共催において当日を迎えていることを伝えました。続いて来賓の皆さんや審査員を一人ずつ紹介しました。

その後、主催者を代表して日本木造住宅産業協会 会長の市川晃氏が、「受賞者の皆さん、この度は『木のあるくらし』作文コンクールの受賞、おめでとうございます。今年の表彰式は久しぶりにリアルでの開催となりました。皆さんと直接お会いすることができ大変うれしく思います。本コンクールも今年で27回目となります。今年も全国各地の小学校や特別支援学校、海外の日本人学校、そしてホームページや会員企業等を通じてたくさんの作品の応募をいただきました。私も読ませて



審査員の方々



国土交通省 住宅局 住宅生産課長 松野秀生氏 祝辞

いただきましたが、新たな着眼点やみずみずしくて様々な感性にあふれた作品が多く、審査員の先生方も受賞作を決めるのに非常にご苦労されたものではないかと思えます。どの作品も身の周りにある「木

のあるくらし」を純粹な視点でとらえ、活き活きと表現されており、皆さんの思いがとてもよく伝わってきました。また、皆さんが一生懸命原稿に向かっている姿を想像し、おかげ様で私も心温まる時間を過ごすことができました。応募いただいた皆さんには、心から敬意を表するとともに感謝を申し上げたいと思います。

さて、今年の夏は命に関わると言われるような異常な暑さが続き、また台風や大雨もあり、受賞者の皆さんもなかなか外で遊ぶ機会が少なかったのではないのでしょうか。これらの現象は、いま世界で問題とされている地球温暖化によるものですが、その原因となっているのは二酸化炭素など温室効果ガスと言われるものです。

皆さんもよく知っている通り、木にはさまざまな働きがあります。その一つに二酸化炭素を吸って私たち生き物に必要な酸素を吐き出すという大切な働きがあります。この働きを増やしていくことによって「地球温暖化」を防ぐことができます。日本の森は木材として利用するために植えられた木がたくさん育っているところ、いわゆる植林地が多くありますが、住宅着工数が減っていったことで使われる量が減り、伐られることなくそのまま放置されている植林地があります。こうした植林地を伐って木材として役立て、そして新しく苗木を植えて大切に育てることで森は若返り、より多くの二酸化炭素を吸ってくれることになります。このように森の循環の仕組みを理解し、木を伐り、使い、植えて育てるということを繰り返していけば、地球の健やかな環境を保つことにもつながります。この作文コンクールを機に、多くの皆さんが『木の大切さやすばらしさ』に気づかれたと思います。これから作文コンクールのテーマである、『木のあるくらし』を通して木や森、そして環境のことについて興味を持ち、考え続けていただければ大変うれしく思います。

最後になりますが、応募してくださったたくさんの小学

生の皆さん、そしていつもこの作文コンクールを支えていただいている保護者、学校関係者、ご後援をいただいているすべての関係者の皆さまに心からの感謝を申し上げます。私からの挨拶とさせていただきます。本日は受賞、誠にありがとうございます」と開会挨拶を述べました。

続いて、来賓を代表して国土交通省 住宅局 住宅生産課長 松野秀生様が、「本日は『木のあるくらし』作文コンクールの受賞、誠にありがとうございます。全国から、あるいは海外から来てくれた皆さん、それから保護者の皆さん、ご家族の皆さん、本当におめでとうございます。国土交通省は、たとえば道路とか、河川とか、公園とか、あるいは住宅もありますし、鉄道、飛行機、船、いろんな分野に関わりがありますが、皆さんが木のあるくらしを題材にした作文コンクールを選んでくれたことに、本当にうれしく思っています。そして、その中でも皆さんは非常にいい文章を書いてくれ、これから表彰されることになっています。ちょっと顔を見ると、皆さん緊張している感じですけど、そんなに怖くないので楽しんでください。私も皆さんが書いてくれた文章を読ませてもらいました。家族のことを書いていたり、家のことを書いていたり、あるいはモノのことを書いていたり、木についていろいろな視点でそれぞれ斬新なところ、あるいはしんみりするところ、そういったもので私も非常にいい時間をもらったと本当に感謝しています。もちろん皆さん方も、たとえば通っている通学路、遊んでいる公園、出かけたときの山など、普段見ている木だけではなくて、文章にすることで一生懸命考えたと思います。それは非常に貴重な経験だったのだらうと思います。さらに、その作文が受賞され、こうして表彰されるために東京に来て……この隣に東京ドームがあるのは気づいたかな？あそこに行ってきたよ、表彰されたんだよってというのは、一生の記念になると思います。先ほど市川会長から日本の木のことについてお話がありました。日本は森林資源、いわゆる木に非常に恵まれている国です。世界の中でも恵まれている国です。ただ、この木はただ単に育っているだけではなく、山の人たちが一生懸命手入れをして、そこから伐り出して、いろんな家にしたり家具にしたりして使い、それを長く大事に使っていく。そういったことをしないと実は循環型社会というのは実現しません。そのようなことに皆さん、早く気づいてくれているのだと思います。そうした思いを友だちや、大人の人たちにしっかりと伝えて、ここに来ている皆さん方が、未来の日本、それから世界のリーダーとなって活躍してくれることを期待して、私からお祝いの言葉としたいと思います。本当におめでとうございます」と祝辞を述べ

べました。



大臣表彰をはじめ 入賞18作品の表彰

国土交通大臣賞は、高学年の部で4年生の岡蒼真さん(三重県)の「ぼくの大事な家」が、低学年の部で2年生の稲葉徕琉さん(茨城県)の「はじめて知った木の大切さ」が、それぞれ受賞しました。農林水産大臣賞は、高学年の部で5年生の土屋璃空さん(埼玉県)の「木のある暮らし」が、低学年の部で1年生の金子和葉さん(福島県)の「ぼくのいえ、むくのいえ」が受賞しました。文部科学大臣賞は、高学年の部で5年生の長柄翠夏さん(東京都)の「木は人を優しく包み、自然へと導く」が、低学年の部で3年生の大和田真寛さん(茨城県)の「ひな姉ちゃんのうめの木」が受賞しました。環境大臣賞は、高学年の部で6年生の吉田野乃さん(滋賀県)の「100年先を考えて」が、低学年の部で3年生の永岡宏樹さん(和歌山県)の「植物の命を編む」が受賞しました。外務大臣賞は、高学年の部で6年生の飯島沙羅さん(アメリカ合衆国)の「木と私」が、低学年の部で3年生の中尾希さん(ニュージーランド)の「ひみつき地のお引っ越し」が受賞しました。



国土交通大臣賞 低学年の部 表彰



農林水産大臣賞 低学年の部 表彰

住宅金融支援機構理事長賞は、高学年の部で5年生の宰務龍さん(兵庫県)の「完成間近のぼくの家」が、低学年の部で3年生の時本岳玖さん(岡山県)の「ぼくの家は百さい」が受賞しました。日本木造住宅産業協会会長賞は、高学年の部で5年生の石田倭土さん(福島県)の「伝えたい、無垢材の良さ」が、低学年の部で1年生の星野志歩さん(茨城県)の「きもちいい木」が受賞しました。朝日小学生新聞賞は、高学年の部で6年生の藤田香澄さん(兵庫県)の「一本の鉛筆の先に」が、低学年の部で3年生の高橋杏さん(長野県)の「木がつなぐいのち」が受賞しました。審査員特別賞は、高学年の部で5年生の大石環さん(千葉県)の「ふみ台作りから学んだこと」が、低学年の部で2年生の木田桧さん(福岡県)の「ぼくとくぬぎ」が受賞しました。



木住協ブロック賞表彰 最優秀団体賞も決定

引き続き、日本木造住宅産業協会ブロック賞の授与に移りました。表彰は、全国10ブロックに分かれて、審査を担当した支部長名で行われました。各賞には、ブロック名と受賞者がお住まいの県の県木を冠したタイトルが付けられました。

北海道ブロック エゾマツ賞は、高学年の部で4年生の加藤麦さん(北海道)の「森は守られている」が、低学年の部で3年生の石本りなさん(北海道)の「森林学習」が受賞しました。東北ブロック ケヤキ賞は、高学年の部で5年生の小川智葵さん(福島県)の「ぼくたちの身近にある木」が、サクラノボ賞は、低学年の部で3年生の深瀬生真さん(山形県)の「ぼくらの自まん」が受賞しました。関東ブロック クロマツ賞は、高学年の部で6年生の茂木わたねさん(群馬県)の「立派に生きるとちの木」が、マキ賞は、低学年の部で1年生の松隈唯さん(千葉県)の「はなびらキャッチ」が受賞しました。北信越ブロック マツ賞は、高学年の部で4年生の竹沢妃織さん(福井県)の「木の柱とわたし」が、低学年の部で1年生の林明生さん(福井県)の「きはつよい」が受賞しました。甲・静岡ブロック モクセイ賞は、高学年の部で6年生の足立愛佳さん(静岡県)の「木と人間の助け合いのリレー」が、低学年の部で1年生の原田茉莉花さん(静岡県)の「まきストーブとわたしのかぞく」が受賞しました。中部ブロック イチイ賞は、高学年の部で4年生の原杏花さん(岐阜県)の「大切な環境」が、ハナノキ賞は、低学年の部で3年生の筒井歩高さん(愛知県)の「大すきなぼくの家」が受賞しました。近畿ブロッ



国土交通大臣賞 高学年の部 朗読



国土交通大臣賞 低学年の部 朗読

クイチョウ賞は、高学年の部で4年生の磯貝瞭憲さん(大阪府)の「その家、取り壊さないで」が、クスノキ賞は、低学年の部で2年生の宰務蘭さん(兵庫県)の「わたしの家は木のおうち」が受賞しました。中国ブロック ダイセンキャラボク賞は、高学年の部で6年生の川勝京志朗さん(鳥取県)の「ほくと桜の木」が、低学年の部で3年生の小谷美結さん(鳥取県)の「木にかこまれた生活」が受賞しました。四国ブロック やまもも賞は、高学年の部で6年生の木村一華さん(徳島県)の「木を使うという事」が、低学年の部で3年生の吉田絢翔さん(徳島県)の「宮大工さんと木造の建物」が受賞しました。九州・沖縄ブロック カイコウズ・クスノキ賞は、高学年の部で5年生の米尾誠悟さん(鹿児島県)の「じいちゃんの牛舎」が、クスノキ賞は、低学年の部で3年生の川岸蓮心さん(佐賀県)の「身近な木のぬくもり」が受賞しました。

なお、佳作として高学年の部12作品、低学年の部12作品の計24作品、また、特別賞として高学年の部8作品、低学年の部5作品の計13作品が選出されました。

続いて、団体賞の表彰に移り、作文コンクールへの取り組みが評価された、江別市立対雁小学校(北海道)が最優秀団体賞に輝きました。また、優秀団体賞として宝塚市立長尾南小学校(兵庫県)、茅ヶ崎市立柳島小学校(神奈川県)、富田林市立喜志小学校(大阪府)、中津川市立付知南小学校(岐阜県)の4校が受賞しました。



各大臣賞の受賞者による 作品の朗読

各賞の授与が終了した後、休憩をはさんで、各大臣賞を受賞した児童による朗読が行われました。児童たちは期待と自信に満ちた表情でステージに上がり、ときに緊張の面持ちで自らの作文を披露。会場から大きな拍手が寄せられました。

最初に、国土交通大臣賞・高学年の部を受賞した4年生の岡蒼真さん(三重県)が、いま住んでいる家が、自分の山の木で建てられたことを祖父から聞かされ、愛おしさを感じるようになると同時に、代々山を守り育ててきた先祖に感謝の気持ちを抱くようになる「ほくの大木の家」を、いきいきと朗読しました。お爺さんのセリフが聞こえてきそうな情感のある朗読でした。続いて、同大臣賞・低学年の部を受賞した2年生の

稲葉徕琉さん(茨城県)が、祖母の家のリフォーム現場で天井裏や壁の中に隠れていた多くの木材を見たことから木に興味を持ち、木は使ってもなくならないのはなぜかという疑問に対して、それが植林活動のおかげであることに思いを馳せた「はじめて知った木の大切さ」を朗読しました。

次に、農林水産大臣賞・高学年の部を受賞した5年生の土屋璃空さん(埼玉県)が、夏休みに祖父の田舎である北海道を訪ねた際、神社で樹齢350年のイチイの木と出会い、木の命についてじっくりと考えることになる「木のある暮らし」を朗読。樹齢の概念や接ぎ木(つぎき)の仕組みなどに触れ、学びの多い夏だったことを語りました。続いて、同大臣賞・低学年の部を受賞した1年生の金子和葉さん(福島県)が、4人の兄弟姉妹が家の中で元気に遊ぶことでキズ跡が付いた無垢の床を見ながら、木には大きなキズがついても自分たちは小さなキズで済んでいることから自分たちは木に守られていると実感し、木に対する感謝の気持ちを抱くようになる「ほくのいえ、むくの

いえ」を朗読しました。

次に、文部科学大臣賞・高学年の部を受賞した5年生の長柄翠夏さん(東京都)が、祖父のお葬式に立ち会った際、人の最後に祭壇や棺、木魚など木製品が寄り添っていることに気づき、人は木に守られながら木とともに自然に帰っていくことを実感する「木は人を優しく包み、自然へと導く」を静かな語り口で朗読。続いて、同大臣賞・低学年の部を受賞した3年生の大和田真寛さん(茨城県)が、従姉妹のひな姉ちゃんが生まれたときに水戸市から贈られた梅の苗木を育て、その梅の実でつくるジュースを、二十歳になるひな姉ちゃんと一緒に飲みたいという思いを綴った「ひな姉ちゃんのうめの木」を朗読しました。

そして、環境大臣賞・高学年の部を受賞した6年生の吉田野乃さん(滋賀県)が、香川県の小豆島で訪れた醤油の蔵元で見た大きな木桶に興味を持ち、木桶にまつわるいろいろな話を聞くうちに、木桶に用いる木の調達の大変さを知り、桶づくりに関わる職人さんにも思いを巡らせることになる「100年先を考えて」を朗読。木にまつわる職業同士のつながりやそれらの循環を保つために、自分にできることから始めたいと語りました。続いて同大臣賞・低学年の部を受賞した3年生の永岡宏樹さん(和歌山県)が、夏休みの工作でつくることにしたツリーハウスの材料を求めて祖父の田舎を訪れ、自然に折れたり人の手で切り落とされたりした木の枝に美しさを見出し、木の生命力を感じる「植物の命を編む」を臨場感豊かに朗読しました。

最後に、外務大臣賞・低学年の部を受賞した3年生の中尾希さん(ニュージーランド)が、母親と一緒に訪れたラッセルという街にある知人の家が、カウリという貴重な木材でつくられていて大切に住み続けていること、前に住んでいたオークランドから家を半分に切ってトラックで運搬したという話に感動する「ひみつき地のお引ッ

こし」をときに笑顔を浮かべながら楽しそうに朗読しました。同大臣賞・高学年の部を受賞した6年生の飯島沙羅さん(アメリカ合衆国)は、欠席のため朗読は行われませんでした。



はせがわ審査員長による講評と 主催者代表による閉会の挨拶

各大臣賞受賞者の皆さんによる朗読に続き、審査員長はせがわゆうじ先生

が、「受賞者の皆さん、おめでとうございます。やはりライブ感があるのはいいですね。作文は活字で読むより本人の書いた文字で読む方がずっといいなと思っていましたが、本人による朗読はさらにいいと感じ、少しうるうるしながら



はせがわゆうじ審査員長による講評

皆さんの朗読を聞いていました。今回受賞された皆さんの作品には、それぞれ何かしらちゃんと光るものがありました。優秀な作品は山ほど集まるのですが、優秀なだけではなく、みんなそれぞれ何か光るものを持っていたなと、いま朗読を聞いてあらためて思いました。

自分が審査で選ぶときにいつも思っていることは、上手か下手かというよりも、何か一言でも響くものがあつたとき、何か他の人にはないけれど、ちょっとここはすごいと思うものを感じたときに、その作品を選ぶようにしています。今回、たとえば「木のあるくらし」という作文の中で、木の命が終わるときというのは、使われなくなっ

たり忘れられたりしたときと書かれていて、すごいなと胸に来ました。子どもの作品という以前に、自分が感動して選ぶということが多いです。毎年審査をさせていただいているので、本当に優秀な作品は山ほど読んでいまして、よく書けている作文というのは、何ていいますか、みんな似た感じになってきちゃうんですね。作文はこう書きましょうということを、ちゃんと習って書いている。上手に書くことは決して悪くはないのですが、上手に書くことばかりに気持ちが向くと、何かこう見えなくなる



外務大臣賞 低学年の部 朗読

こともあって、その子にしかない素敵どころや魅力が見えづらくなったりすることもあるんですよ。上手に書くよりも一番大事なことは、この人じゃなければ書けないというもの、この人にしかない何か素敵どころや魅力を、作文にしみ出させているかということのような気がします。つまり、作者自身がどんな人か、どんな素敵どころのある人かっていうことが、やはり一番ですよ。素敵の人が書いたりつくったりしたものって、だいたい素敵で魅力的になります。それなりの人がつくったものは、多分ですけど、それなりになっている気がします。結論をいいますと、素敵な人でいてくださいということです。ぜひ、これをバネに、作品づくりを続けてください。ありがとうございました」と講評を述べました。

その後、主催者を代表して日本木造住宅産業協会 専務理事の加藤永氏が、「小学生の皆さま、今年も大変多くのすばらしい作文を書いていただき、ありがとうございました。また、本日の受賞、本当におめでとうございます。ご家族の方、あるいは学校の先生など、いろいろな方にご協力いただいたかと思います。関係者の皆さま全員にお礼を申し上げたいと思います。おかげさまで、今年も本当にすばらしい作品、作文に出会うことができました。さて、この表彰式も少し長い時間になってきましたので、お



閉会の挨拶をする加藤永専務理事

疲れかなと思うのですが、最後まで元気に朗読もしていただき、ありがとうございました。それでは、以上をもちまして第27回『木のある暮らし』作文コンクールの表彰式を閉会とさせていただきます。本日は大変おめでとうございました」と閉会の挨拶と感謝の意を伝えました。



受賞者、来賓、審査員全員が最後にステージ上で記念撮影

その後、受賞した児童、来賓の皆さん、審査員がステージに並んで記念撮影を行い、表彰式を締めくくりました。表彰式と朗読では緊張した表情の児童たちでしたが、当日最後のプログラムと言うこともあり、晴れ晴れとした笑顔が見られました。木住協のオフィシャルカメラマンの撮影後には、ご家族の皆さまのたくさんのスマートフォンやカメラがステージに向けられました。

木住協のホームページでは、作文コンクールのページ内に受賞者名を掲載するほか、年内中に表彰式のダイジェスト映像を公開する予定です。なお、表彰式当日は学校行事等で残念ながら欠席された受賞者が何名かいましたが、他の受賞者と同様に賞状と副賞を後日送付しており、作文コンクールに応募していただいた皆さんには記念品を贈呈しています。

木住協では、これからも「木のある暮らし」をテーマに、地球環境にやさしく持続可能な素材である「木」の良さを訴え、日本の住文化の原点とも言える木造住宅の素晴らしさを広く告知することなどを目的に、この作文コンクールを継続していきたいと考えています。



受賞者・来賓・審査員による記念撮影

受賞者と作品名

大臣賞等・ブロック賞

	賞 名	題 名	名 前	都道府県
低学年の部 (小学1年生から3年生)	国土交通大臣賞	はじめて知った木の大切さ	稲葉 徠琉	茨城県
	農林水産大臣賞	ぼくのいえ、むくのいえ	金子 和葉	福島県
	文部科学大臣賞	ひな姉ちゃんのうめの木	大和田 真寛	茨城県
	環境大臣賞	植物の命を編む	永岡 宏樹	和歌山県
	外務大臣賞	ひみつき地のお引っこし	中尾 希	ニュージーランド
	住宅金融支援機構理事長賞	ぼくの家は百さい	時本 岳玖	岡山県
	日本木造住宅産業協会会長賞	きもちいい木	星野 志歩	茨城県
	朝日小学生新聞賞	木がつなぐいのち	高橋 杏	長野県
	審査員特別賞	ぼくとくぬぎ	木田 松	福岡県
	北海道ブロック エゾマツ賞	森林学習	石本 りな	北海道
	東北ブロック サクランボ賞	ぼくらの自まん	深瀬 生真	山形県
	関東ブロック マキ賞	はなびらキャッチ	松隈 唯	千葉県
	北信越ブロック マツ賞	きはつよい	林 明生	福井県
	甲・静岡ブロック モクセイ賞	「まきストーブとわたしのかぞく」	原田 茉莉花	静岡県
	中部ブロック ハナノキ賞	大すきなぼくの家	筒井 歩高	愛知県
	近畿ブロック クスノキ賞	わたしの家は木のおうち	幸務 蘭	兵庫県
	中国ブロック ダイセンキャラボク賞	木にかこまれた生活	小谷 美結	鳥取県
	四国ブロック やまもも賞	宮大工さんと木造の建物	吉田 絢翔	徳島県
	九州・沖縄ブロック クスノキ賞	「身近な木のぬくもり」	川岸 蓮心	佐賀県
高学年の部 (小学4年生から6年生)	国土交通大臣賞	ぼくの大事な家	岡 蒼真	三重県
	農林水産大臣賞	木のあるくらし	土屋 璃空	埼玉県
	文部科学大臣賞	木は人を優しく包み、自然へと導く	長柄 翠夏	東京都
	環境大臣賞	100 年先を考えて	吉田 野乃	滋賀県
	外務大臣賞	木と私	飯島 沙羅	アメリカ合衆国
	住宅金融支援機構理事長賞	完成間近のぼくの家	幸務 龍	兵庫県
	日本木造住宅産業協会会長賞	伝えたい、無垢材の良さ	石田 俊士	福島県
	朝日小学生新聞賞	一本の鉛筆の先に	藤田 香澄	兵庫県
	審査員特別賞	ふみ台作りから学んだこと	大石 環	千葉県
	北海道ブロック エゾマツ賞	森は守られている	加藤 麦	北海道
	東北ブロック ケヤキ賞	「ぼくたちの身近にある木」	小川 智葵	福島県
	関東ブロック クロマツ賞	立派に生きたものの木	茂木 わたね	群馬県
	北信越ブロック マツ賞	木の柱とわたし	竹沢 妃織	福井県
	甲・静岡ブロック モクセイ賞	木と人間の助け合いのリレー	足立 愛佳	静岡県
	中部ブロック イチイ賞	大切な環境	原 杏花	岐阜県
	近畿ブロック イチョウ賞	その家、取り壊さないで	磯貝 瞭憲	大阪府
	中国ブロック ダイセンキャラボク賞	ぼくと桜の木	川勝 京志朗	鳥取県
	四国ブロック やまもも賞	木を使うという事	木村 一華	徳島県
	九州・沖縄ブロック カイコウズ・クスノキ賞	じいちゃんの牛舎	米尾 誠悟	鹿児島県

佳作

低学年の部	高学年の部
岩田 武蔵 群馬県	阿部 環奈 シンガポール共和国
鬼頭 伸弥 東京都	片岡 望 栃木県
草間 紬 茨城県	金矢 蒔人 福岡県
小西 蓮 アメリカ合衆国	酒谷 実央 山形県
近藤 朱 千葉県	塚越 甘楽 群馬県
塩谷 翠咲 沖縄県	長畑 乃愛 岡山県
堰本 光咲 鳥取県	中村 悠愛 千葉県
永野 葵 群馬県	ハインツェ 悠樹 ドイツ連邦共和国
中山 華弥子 福岡県	濱野 百花 福岡県
藤田 美織 山口県	松山 城司 ニュージーランド
前澤 蔵之介 栃木県	湊 はな 和歌山県
山田 奏太 三重県	山本 恵禾 新潟県

特別賞

低学年の部	高学年の部
吾郷 知希 島根県	井上 和花 広島県
彌永 夏 佐賀県	佐伯 陽晴 京都府
津谷 汐咲 青森県	白取 璃碧 青森県
藤内 佑月 北海道	洲崎 夢乃 京都府
松浦 優斗 東京都	C・H 東京都
	永田 煌 埼玉県
	本宮 幹成 広島県
	宮崎 陸音 広島県

団体の部

最優秀団体賞	江別市立対雁小学校
	宝塚市立長尾南小学校
優秀団体賞	茅ヶ崎市立柳島小学校
	富田林市立喜志小学校
	中津川市立付知南小学校

審査員の講評



イラストレーター
はせがわゆうじ氏

今年も優秀な作品がいっぱい出揃いました。

審査員の評価も比較的、割れた方じゃないでしょうか。

そんな中、受賞した作品にはどれも、なるほど～と思うところがありました。

どうして木はなくならないんだろう？という疑問からいろいろ分かってくる「はじめて知った木の大切さ」は素直な文体が素敵です。

ケイトさんにインタビューをして、レポートのようによくまとまっている「ひみつき地のお引っこし」。家をふたつに切って運ぶとは…知りませんでした。

世界一の黒柱がある「ほくの家は百さい」。二百歳まで大丈夫でしょう！

遠心分離にかけられたように…という表現が素敵な「植物の命を編む」。

流れるような文学的表現に、審査をしていることを忘れてしまったほどの「木は人を優しく包み、自然へと導く」。

見えないところで繋がっている仕事の成り立ちに、参加できることはその商品を選ぶこと、と教えてくれる「100年先を考えて」。

木の命はいつ終わるのだろう？の答えが、使わなかったり忘れ去られたりしたら…と。とても深く考えさせられる「木のある暮らし」などなど。

毎年みなさんの作品にはよく調べたね～という感心と、そこ？っていう視点のおもしろさと、なるほど～とうなずいてしまうポイントがあります。

選考のために読んではいのですが、新鮮な感覚に触れると自分自身の創作にもなにかしら刺激を受けている気がして、充実した時間を過ごさせていただいています。

受賞されたみなさんはぜひ、今後も創作活動を行って欲しいです。

次は更にあっ！と驚く作品を楽しみにしています。



南雲国語教室主宰
南雲 ゆりか氏

みなさんが一生懸命に紡いだ言葉を見逃さないよう、精読しながら印をつけてみました。ユニークな表現、鋭い着眼点、なるほどと膝を打ったところなどなど。どの作品にもキラリと光るところがあり、木を大切に思う気持ちがよく伝わってきました。

審査会で特に注目されたのは、様子や気持ちをありありと表現した作品、体験を掘り下げ、よく調べ、深く考察している作品でした。

まずは、にぎやかな足音から始まる「ほくのいえ、むくのいえ」。無駄な言葉がなく勢いがあります。「おおきなあとをのこす、むくのゆか。ちいさなきずあとのほく。いつもまもってくれてありがとう。」という表現に、はっとさせられました。戦いごっこで床に大きな跡がついたのは、ほくにけがをさせないように床が守ってくれたからだ、と感謝しているのですね。床の傷をこんな風にとらえる感性、表現力に脱帽しました。

「木は人を優しく包み、自然へと導く」は静謐で凜とした作品でした。おじいちゃんとのお別れを経験し、「最も悲しい時間は木と花が静かに寄り添っていた」と語ります。「木と人の関わりは、亡くなったときに最も深いものとなる」という言葉、本当にそのとおりだと気づかされました。構成も洗練されていてプロのエッセイのようでした。

海外からの作品も新鮮でした。「ひみつき地のお引っこし」はインタビューした内容を、実際に見たことや感想を交えながら生き生きと表現していました。

五感に訴えてくる作品も多く、木の香りが漂ってきたり、緑の木に映える赤い鳥が目に見えたり。自家製の梅ジュースや木樽で仕込んだお醤油、くぬぎで育てた椎茸もおいしそうでした。実に楽しかったです。どうもありがとうございました。





国土交通省 住宅局
住宅生産課 木造住宅振興室長
中澤 篤志氏

「木のあるくらし」作文コンクールには、小学校一年生から六年生まで、また支援学校や海外の学校からも、たくさんの応募があります。応募作品に目を通していく中で、皆さんの作品のもつ熱量に、たびたび圧倒されました。



低学年の部の国土交通大臣賞は、「はじめて知った木の大切さ」です。最近の住宅では、木造であっても石こうボードなどで覆われ、木が使われていることを住まい手が実感できる機会が、あまりありません。「家って本とうに木で出来ているんだな」には、現代の小学生らしい、率直な感想が現れていて、心の中でクスツとなりました。祖母の家に木材が使われていることを実感したことをきっかけに、自分の周囲にも木でできたものがたくさんあることに気づき、さらには「しょく林」による森林の再生にまで問題意識が展開された、素晴らしい作品です。

高学年の部の国土交通大臣賞は、「ぼくの大事な家」です。現代では木造戸建て住宅以外にも様々な住宅が供給されており、「実は、友達の家が、新しくてきれいで少しうらやましいな」は、今時の小学生の一般的な感覚なのでしょう。この作品では、そのような思いを抱いている中で、祖父や母から自分の家が建てられるまでの「物語」を教えられ、築四十年近い日本家屋を「自まんの家」と思えるようになるまでの心の動きが丁寧に描かれています。また、「地ごく組み」や「通し柱言う柱が・・・十二本どーんと通してある」といった祖父の言葉の一つひとつから、「ぼくの大事な家」の様子が、目の前に迫力をもって浮かび上がるところも、本作品の大きな特徴です。自分の家を誇りに思うだけでなく、祖先が代々山の手入れをしてきてくれたことへの感謝の気持ちに思い至った点も評価されました。

受賞作品以外にも、無垢材のよさを力強く伝える作品、木や木材との接点を深く掘り下げた作品、海外の「木のあるくらし」を詳しく紹介する作品など、多数の力作がありました。来年以降も、たくさんの応募があることを期待しております。



独立行政法人 住宅金融支援機構
マンション・まちづくり支援部 技術統括室長
相原 康生氏

27回目を迎える「木のあるくらし」作文コンクール。全国の小学生のみなさまから3,826件の応募がありました。「木のあるくらし」を子供らしい目線で見ており、どの作品も小学生らしく、とてもいきいきと表現されていました。



低学年の部の住宅金融支援機構理事長賞「ぼくの家は百さい」は、築100年経つ家をリフォームして暮らすお話で、リフォーム中にむき出しになった木や骨組みを見ることで家に興味をもちます。おじいちゃんに、昔の暮らし、屋根が藁で作られていたこと、素晴らしい大黒柱があることを聞き、筆者の大好きなおうちになります。おじいちゃんの話も臨場感たっぷり。私もその場にいるみたいで自慢の家を見てみたくなる作品でした。

高学年の部の「完成間近のぼくの家」は、木の家を建てることをきっかけに、木を使うことで動物達のすみかが失われているのではないかと木について疑問を持つことになります。調べていくにつれて木は使うだけでなく、苗木をうえていること、木は丈夫、火にも強いということもわかり安心して暮らせることがわかります。疑問を持ちいろいろと調べている情景が目につくたび、一つずつ解決するごとに笑顔を浮かべ、今は大好きなおうちに引っ越し、机の上で新たな疑問を調べていることだろうと思います。

今回の2作品は、どちらも大好きなおうちを違う角度で表現しており、作者のおうちへの思いが伝わってきます。また、作文を通して、木そのものや木でつくる家に関する親と子、おじいちゃんおばあちゃんと子の会話が生まれ、そこに幸せな家族がいる情景が浮かび上がります。木のあるくらしが、こども達にいろいろな興味を持たせ、成長の一助となっているのだと感じました。

受賞されたみなさまおめでとうございます。



朝日学生新聞社 取締役営業担当
兼 大阪支社長
櫻木 範行氏

今年から審査員を拝命いたしました。
どうかよろしくお願いします。

皆さんからの思いのこもった作品を
拝読させていただき、大変に新鮮な気
持ちになりました。皆さんの持っている
視点のすばらしさ、ビビッドな文章表現、
そして自然を大切にする心、どれもが日
常、大人たちがかつては持っていたはず
ですが、今日、忘れかけているものばか
りだった気がします。

皆さんは、きっと眼前に広がる未来への希望や不安を抱えながら毎日
過ごされていると思います。自分たちを取り巻く自然や文化が、このまま
保全されていくのか、ややもすると、失われるのではないかと、これまで綿々
と築き上げてこられた地球環境を、一体自分たちがどのような努力を心
掛けたり守り通していけるのだろうか、そんな問題意識がすべての作品
に見え隠れしています。そして、皆さんが今回の作品を通じて投げかけて
くれた問題提起を、作品に触れた多くの大人たちが重く受け止め、これ
からの豊かな暮らしにつなげていかなければ、と感じていると思います。

「木のある暮らし」というテーマから、多くの方々は「温もり」をイメ
ジされていました。私も同様です。そして「温もり」という言葉からは、家
族や友人など、日常、自分を優しく包んでくれているのだけれど、これま
で特別、意識してこなかった宝のような存在を、改めて浮かび上がらせ
てくれたようです。つまり、「木のある暮らし」とは、本来私たちが最も大
事に育むべき日常のことであり、そして我々には、それらを維持、発展さ
せながら次の世代へとバトンタッチするミッションがあるのだと、皆さん
から寄せられた多くの作品から学ばせて頂きました。

弊社の発行する朝日小学生新聞や中学生新聞では、今、社会で起きて
いる様々な出来事に対して読者の皆さんが自分の考えを深めていくきつ
かけになれるよう、日々、紙面づくりに勤しんでおります。新聞に触れる
ことで皆さんの好奇心が刺激され、社会に対する関心の幅も広がり、「もっ
と知りたい」「もっと理解したい」という行動力の源泉を培って頂ければ、
と社員一同、願っております。

今回のコンクールで、作文という、自分のオリジナル作品を書き上げ
た皆さんは、きっと大きな達成感や満足感を味わってらっしゃることと
思います。そしてこの自らの作品を完成され、その達成感で満たされた
経験こそが、きっとこれからも、物事を途中で投げ出すことなく必ず完結
させてみせる、という強い意欲へと皆さんを至らしめることでしょう。ど
うかこれからも、数多くの文章に触れることを心掛けて頂き、多くの先
人たちが表現技術を学び、今の気持ちにぴったりの言葉をすぐに取り
出せる引き出しを数多く、自分の中に備えて頂きたいと思います。

人は一人では生きていけず、それが故に「言葉」というコミュニケーショ
ンツールが豊かであればあるほど、充実した、楽しい未来が開けていく
のですから。

皆さんのこれからが、充実した毎日で満ち溢れますように。有難うご
ざいました。



一般社団法人 日本木造住宅産業協会
専務理事
加藤 永氏

今年もたくさんの応募をいた
だき、ありがとうございました。
主催者を代表して、お礼を申し
上げます。

応募いただいた皆さんの木に
対する親しみや思いが感じられ
る作品ばかりでした。そして、豊
かな感性、完成度の高い表現力、
自由な発想や素直な思い、気になる問題を自ら調べる熱
心さに感心しました。

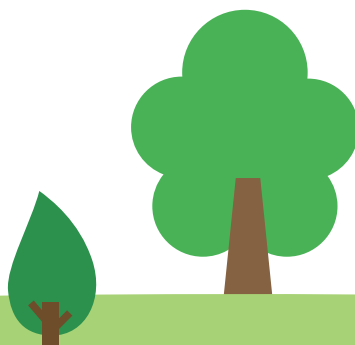
木造の住宅や建物はもちろん、様々な木製の家具や文
房具、思い出の樹木や環境・防災・社会問題への関心など、
実に多様な「木のある暮らし」に出会えました。

そんな中で、日本木造住宅産業協会会長賞は、いずれも、
無垢材の良さを実感する自宅への思いを込めた作品とな
りました。無垢材の床の柔らかな感触や暖かさ、木の香り
や経年による色合いの変化などを、生き生きと語っています。

低学年の部の「きもちいい木」は、「ほんものの木でできた」
家と「いっしょにせいちようしている」という感覚と、それ
が「たのしみ」という熱い気持ちが伝わってきます。高学年
の部の「伝えたい、無垢材の良さ」は、「真つさらな床に傷
を作ってしまうのがっかりした」ものの、「それも歴史」であり
「いい味」と言う家族や大工さんの言葉に納得する姿が印
象的です。

各大臣賞をはじめとする受賞作には、祖父母や家族、友
人などとの思い出や体験に基づく作品も多く見られます。
木というものが、技術や文化とともに、人と人のつながり
にも関わっていることに気づかされました。

この他にも、印象に残るたくさんの作品がありました。
皆さんの素晴らしい作品に接することができ、大変幸せで
した。来年も、たくさんの素敵な作品の応募をお待ちして
います。



「2023年度(令和5年度)木住協自主統計および 着工統計の分析報告書」概要報告

業務・広報委員会(村岡照生委員長)はこのほど、『2023年度(令和5年度)木住協自主統計および着工統計の分析』結果をまとめ、報告書として発行した。統計は1種A・B・C会員を対象に2023年度(令和5年4月1日～令和6年3月31日)に建設した木造軸組住宅の着工戸数をアンケート形式で集計したもので、今回で35回目の調査となった。

① 自主統計回答率

- 昨年度の回収率 86.6%から 0.7%アップした。

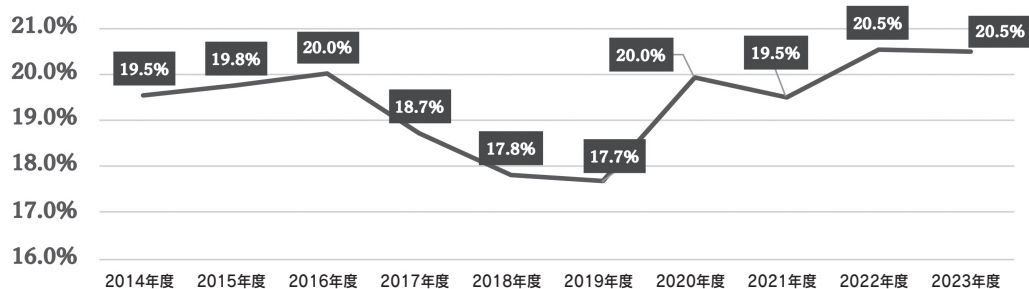
	1種A会員	1種B会員	1種C会員	合計
調査対象数	112	283	84	479
回収数	98	247	73	418
回収率	87.5%	87.3%	86.9%	87.3%

② 住宅着工戸数と木住協シェア(対前年比)

- 木住協の戸建住宅は「全て木造軸組工法」。住宅着工数に占める木造戸建て戸数は前年度 7.1% 減。木住協戸建ては前年度 7.2% 減で住宅着工戸数の木造戸建ての減少幅とほぼ同じ結果となった。

	区 分	2023年度 (イ)	2022年度 (ロ)	前年度比(戸) (イーロ)	前年度比(率)
木住協	住宅着工戸数	85,719	89,880	▲ 4,161	▲ 4.6 %
	うち戸建戸数(B)	79,459	85,647	▲ 6,188	▲ 7.2 %
	うち木造3階建て戸数(E)	8,532	8,862	▲ 330	▲ 3.7 %
	うち共同住宅戸数	6,260	4,233	+ 2,027	+ 47.9 %
全国	住宅着工戸数	800,176	860,828	▲ 60,652	▲ 7.0 %
	うち戸建戸数(A)	432,603	470,770	▲ 38,167	▲ 8.1 %
	うち木造戸建戸数(C)	387,302	416,893	▲ 29,591	▲ 7.1 %
	うち木造3階建て戸数(D)	-	-	-	-
	うち共同住宅戸数	367,573	390,058	▲ 22,485	▲ 5.8 %
	うち木造共同住宅戸数	63,884	56,174	+ 7,710	+ 13.7 %
シェア	木造戸建て住宅に占める木住協シェア(B/C)	20.5%	20.5%	-	▲ 0.0 ポイント
	全戸建て住宅に占める木造戸建シェア(C/A)	89.5%	88.6%	-	+ 1.0 ポイント

③ 木造戸建住宅における木住協シェアの推移



④ 認定長期優良住宅(戸建て) 着工戸数

- 住宅着工統計(戸建)に占める認定長期優良住宅の割合は 29.1% (前年比 104.6%) となった。木住協戸建住宅に占める認定長期優良住宅の割合は 40.9% (前年比 105.9%) となった。共に戸建住宅での構成比が向上し住宅の高品質化が進んだ。

		2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
住宅着工統計 新設住宅(戸建)	戸数(A)	459,425	414,072	447,428	416,893	387,302
長期優良住宅建築等計画の認定(戸建)	戸数(B)	106,611	100,628	118,184	115,776	112,725
住宅着工統計新設住宅(戸建)に占める認定長期優良住宅シェア(B/A)		23.2%	24.3%	26.4%	27.8%	29.1%
木住協戸建住宅	戸数(C)	81,216	82,647	87,304	85,647	79,459
木住協長期優良住宅	戸数(D)	30,938	28,318	33,776	33,080	32,479
長期優良住宅建築等計画の認定に占める木住協シェア(D/B)		29.0%	28.1%	28.6%	28.6%	28.8%
木住協戸建住宅に占める認定長期優良住宅の割合(D/C)		38.1%	34.3%	38.7%	38.6%	40.9%

⑤ 木住協戸建住宅における平成28年省エネルギー基準適合住宅(平成25年省エネルギー基準適合住宅を含む)の推移

- 2023年度における、平成28年省エネルギー基準適合住宅(平成25年省エネルギー基準適合住宅を含む)は64,729戸と前年度より戸数で2,119戸減少、木住協戸建住宅に占める割合は前年度より3.4ポイント増の81.5%となった。

		2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
木住協戸建住宅戸数	戸数	81,216	82,647	87,304	85,647	79,459
	令和元年度比	100.0	101.8	107.5	105.5	97.8
平成28年省エネルギー基準適合住宅戸数	戸数	67,109	67,127	65,819	66,848	64,729
木住協戸建住宅に占める平成28年省エネルギー基準適合住宅シェア		82.6%	81.2%	75.4%	78.1%	81.5%

⑥ 太陽光発電搭載住宅(戸建)着工戸数

- 2023年度の「太陽光発電搭載住宅」は27,089戸で、前年度比2.7%の増加となった。木住協戸建住宅に占める太陽光発電搭載住宅のシェアは、34.1%となった。

		2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
木住協 太陽光発電搭載住宅	戸数(A)	23,946	20,447	23,272	26,920	27,089
木住協 戸建住宅戸数	戸数(B)	81,216	82,647	87,304	85,647	79,459
木住協戸建住宅に占める太陽光発電搭載住宅シェア (A/B)		29.5%	24.7%	26.7%	31.4%	34.1%

⑦ ZEH適合住宅(戸建)着工戸数(ニアリー-ZEH適合住宅を含む)

- 2023年度の「ZEH適合住宅(ニアリー-ZEH適合住宅を含む)」20,945戸で、前年度から91戸、率は0.4%の増加となった。木住協戸建住宅に占めるシェアは26.4%となり、昨年度より2.1ポイント増となった。

		2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
木住協 ZEH適合住宅	戸数(A)	9,251	10,877	15,883	20,854	20,945
木住協 戸建住宅戸数	戸数(B)	81,216	82,647	87,304	85,647	79,459
木住協戸建住宅に占めるZEH適合住宅シェア (A/B)		11.4%	13.2%	18.2%	24.3%	26.4%

【参考】調査項目『2023年度 自主統計エリア別構成比』

	住宅着工内 木造戸建	木住協 戸建	木住協戸建 平成28年省 エネルギー 基準適合住 宅(戸)	木住協戸建 長期優良住 宅の着工戸 数	木住協戸建 太陽光発電 搭載住宅 (戸)	木住協戸建 ZEH適合 住宅(戸、ニ アリー-ZEH 適合住宅 を含む)	住宅着工 (木造戸建 て)内の木 住協戸建の シェア率	省エネの木 住協戸建 (数)にお ける構成比	長期優良の 木住協戸建 (数)にお ける構成比	太陽光搭 載住宅の 木住協戸 建(数)に おける 構成比	ZEH適合住 宅の木住協 戸建(数)に おける構 成比
	①	②	③	④	⑤	⑥	②/①	③/②	④/②	⑤/②	⑥/②
北海道	11,151	1,293	1,242	493	202	165	11.6%	96.1%	38.1%	15.6%	12.8%
東北計	31,219	3,988	3,291	1,667	1,480	992	12.8%	82.5%	41.8%	37.1%	24.9%
関東計	138,994	35,388	28,705	10,234	9,623	6,801	25.5%	81.1%	28.9%	27.2%	19.2%
北陸計	16,631	2,718	2,143	1,083	725	681	16.3%	78.8%	39.8%	26.7%	25.1%
中部計	62,127	14,466	11,694	7,883	6,100	4,987	23.3%	80.8%	54.5%	42.2%	34.5%
近畿計	48,668	8,375	6,805	4,123	3,129	2,703	17.2%	81.3%	49.2%	37.4%	32.3%
中国計	22,339	3,660	2,979	2,031	1,788	1,291	16.4%	81.4%	55.5%	48.9%	35.3%
四国計	12,184	2,288	1,541	1,061	1,074	897	18.8%	67.4%	46.4%	46.9%	39.2%
九州計	42,165	6,977	6,051	3,788	2,955	2,417	16.5%	86.7%	54.3%	42.4%	34.6%
沖縄県	1,824	306	278	116	13	11	16.8%	90.8%	37.9%	4.2%	3.6%
全 国	387,302	79,459	64,729	32,479	27,089	20,945	20.5%	81.5%	40.9%	34.1%	26.4%

住宅着工(木造戸建)内の木住協戸建のシェア率

全国シェアの20.5%よりも高いエリアは関東25.5%、中部23.3%で、他エリアは全国シェアを割り込む結果となった。

平成28年省エネルギー基準適合住宅

全国構成比の81.5%よりも構成比の高いエリアは北海道96.1%、沖縄90.8%、九州86.7%、東北82.5%で他は23.3%で、他エリアは全国構成比を割り込む結果となった。

長期優良住宅適合住宅

全国構成比の40.9%よりも構成比の高いエリアは中国55.5%、中部54.5%、九州54.3%、近畿49.2%、四国46.4%、東北41.8%で他は全国構成比を割り込む結果となった。

太陽光搭載住宅

全国構成比の34.1%よりも構成比の高いエリアは中国48.9%、四国46.9%、九州42.4%、中部42.2%、近畿37.4%、東北37.1%で他は全国構成比を割り込む結果となった。

ZEH適合住宅

全国構成比の26.4%よりも構成比の高いエリアは四国39.2%、中国35.3%、九州34.6%、中部34.5%、近畿32.3%で他は全国構成比を割り込む結果となった。

日本木造住宅産業協会 住まいのトレンドセミナー
2024年10月1日

「建物のLCAの動向と脱炭素を見すえた建材のLCAデータ(EPD等)のあり方」

武蔵野大学 工学部 サステナビリティ学科 准教授 磯部孝行氏

武蔵野大学 工学部 サステナビリティ学科
准教授 磯部孝行氏が、「建物のLCAの動向と
脱炭素を見すえた建材のLCAデータ(EPD等)の
あり方」について講演

●セミナー要旨

資材・流通委員会(入山朋之委員長)は、令和6年度 第3回の「住まいのトレンドセミナー」を2024年10月1日に開催しました。今回は武蔵野大学 工学部 サステナビリティ学科 准教授 磯部孝行氏が、「建物のLCAの動向と脱炭素を見すえた建材のLCAデータ(EPD等)のあり方」をテーマに講演を行いました。



1. 建築分野におけるLCAの動向

磯部氏は昨今のネットゼロ(カーボンニュートラル)の動きは、2020年10月の政府によるカーボンニュートラル宣言を受けて加速したと言及。その流れを受けて住宅業界においても省エネ義務化、ZEH・ZEBの普及に留まらず、ライフサイクルカーボンマイナス(LCCM)の概念が住宅から建築物へ拡張され、2022年度に「ゼロカーボンビル推進会議」が発足したことが大きいと話しました。

この流れの背景には、「GHGプロトコル」という温室効果ガス(Greenhouse Gas: GHG)の排出量を算定・報告する際の国際的な基準が重視されたことから、住宅・建設・不動産業界では資材を調達する際の温室効果ガスの排出量の算定が重要となったことを説明。その結果、2021年あたりから大手不動産会社などを中心に建物のホールライフカーボン(LCCO₂)を算定するための議論が活発化し、不動産協会がGHG排出算定マニュアルを策定し、業界として同じルールに則った評価をしていこうという業界の動向を説明しました。

2. なぜ建設産業全体が建設段階のCO₂排出量を気にするのか？

そもそも、なぜ建設産業全体が建設(建材製造)段階のCO₂排出量を気にする必要があるのか。それは、まず建築の運用時のCO₂排出量(例えば、空調や照明などの使用による)が将来的にゼロに向かっていけば、必然的に建築の設計から新築時のCO₂排出量の割合が高まることになる。そこで次なる削減分(努力分)として、建設(建材製造を含む)に注目が集まったのだと解説。

そうした風潮の中、建築業界も動きを見せ、日本建築学会においては2024年には建物のLCAの考え方を示すとともにデータベースを最新の情報に更新。さらにゼロカーボンビル推進会議では国際的に通用する建物のホールライフカーボン(LCCO₂)評価の枠組みを整備し、算定ツールであるJ-CAT試行版を2024年5月に公開。今年10月には正式版が公開されることを発表しました。

同時に磯部氏が考える建物のCO₂削減の方策も示され、①低炭素な材料、リサイクル・リユース材料の活用 ②材料・建材生産の工夫や建物の長寿命化などによる省資

源化 ③省エネ化、再生可能エネルギーの活用とシンプルな対応でネットゼロが実現できるのではないかの考えを述べました。

3.建物のLCAとデータベース

●建物のLCAとは

まずLCA(Life Cycle Assessment)の定義を「対象製品のライフサイクル(ゆりかごから墓場まで)の環境負荷(CO₂排出量だけではない)を評価し定量化する手法」=「環境のものさし」であることに言及。コストを環境負荷に置き換えたものであると理解していいと述べました。

またLCAに関する国際規格もあり、建物のライフサイクルをステージごとに細かく分けて判断することでより正確な数値が算出できるように規定されていることを解説。その規格はそのままJ-CAT「建築物ホールライフカーボン算定ツール」にも採用され、同ツールが国際基準に則られたものであることを強調しました。

●建物のLCAの算出方法

算定方法は単純で、「建設資材製造分のLCA」=「各建設資材の資源投入量×CO₂排出原単位」で、①産業技術総合研究所が提供する積上法によるデータベース「IDEA」を用いるもの ②日本建築学会が提供する産業連関法によるデータベース「AIJ-LCA」を用いるものがあることを紹介。そして、①は日本トップクラスのデータベースにより算定者の収集負荷を大幅に削減できるほか、個別製品の製造プロセスを反映しやすい評価手法であること、②はCO₂、SOx、NOxなど主要6種類に特化したツールであり、建築業界における主要製品の標準的な環境負荷が得られるなど、互いの手法の違いとメリットを解説しました。

4.EPD(製品環境宣言)とは

EPDとは、ライフサイクルアセスメント(LCA)に基づく第三者認証を受けた客観的な報告書のこと。製品が環境などに与える潜在的な影響に関する情報を伝える制度で、企業における環境情報の開示情報の一つと説明。一方で、EPDは企業活動の透明性を明らかにする一つの手段であり、製品の環境負荷を比較するための制度ではない点も強調しました。

さらに環境負荷を算定するためには製品ごとに定めるルール(PCR)で算定・公表する必要がある専門知識を要すること、そして第三者認証による環境情報の品質担保が得られる一方で、EPDを取得するには、算定だけでなく登

録公開料など必要な現状を説明しました。

5.EPD等の環境負荷データの作成とその考え方

●環境負荷データの算定方法

「ある資材・サービスのCO₂排出量」=Σ(活動量×CO₂排出原単位)と、比較的シンプルに求められるのに対し、建物のCO₂排出量(建設時)は多くの段階があり、かなり面倒である。そこで今後は建物のCO₂(建設時)を個別製品群で評価しつつ、既存データベース(DB)を活用して不足分の資材・設備EPDを作成するのが望ましいと説明しました。

●個別建材・設備データ作成のポイント

個別建材・設備データを作成するにあたり、LCAの実績がある業界・企業では、①建設資材の共通ルールに基づく算定ルールを定める ②各建材・設備でCO₂排出量削減のポイントが異なる点に留意する ③各建材・設備で合理的な算定ルール(個別)を協議し定めることが大切であると述べました。

またLCAの実績がない業界・企業では、①最初から完璧なデータ作成は困難なので、主要構成資材、製造時のエネルギー消費量など、できるところから把握し、②関連企業との情報交換・共有しながら、③先行する業界などの算定ルールを参考に合理的な算定ルールを定めて、「当該製品のCO₂排出量の特徴、削減の方策などを整理することが重要」と述べました。

6.建設業界の皆様に向けて

EPD/個別建材・設備データベースは、企業の環境貢献を製品のCO₂排出量として社会に発信できる有効な制度で、企業のアピールにもつながるもの。個別製品と密接に関連したCO₂削減を検証・実現するためのデータベースを構築するためには、多くの業界、企業様の協力が必要不可欠であることを話しました。

そこで今後は建設業界の皆様と算定ルールを制定するために、どこを評価するべきかを議論しながら、各建材・設備の特徴を反映した合理的な個別ルールをつくりあげていきたいと抱負を述べ、さらに「新たに取り組む業界や企業に対して、私はもちろん研究仲間によるアドバイスや技術支援は惜しまない」として情報の今後のEPDのさらなる普及を願い、セミナーを終えました。

優秀な技能・技術を持ち後進への指導・育成などで 木住協推薦の大工技能者3人が国交大臣から 「建設マスター」に顕彰 「建設ジュニアマスター」にも2人が顕彰

10月18日に令和6年度「優秀施工者国土交通大臣顕彰式典」を開催し、優秀な技術・技能を持つ建設技能者（建設マスター・452名）及び青年技能者（建設ジュニアマスター・121名）を顕彰し、建設マスター受賞者の代表へ堂故茂副大臣が顕彰状を授与しました。

建設マスターとは、建設現場の第一線で「ものづくり」に直接従事している方の中から、特に優秀な技術・技能を持ち、後進の指導・育成等に多大な貢献をしている建設技能者を国土交通（建設）大臣が顕彰するもの。建設ジュニアマスターは、同じく優秀な技術・技能を有し、今後さらなる活躍が期待される青年技能者の方々を対象としたもの。「ものづくり」に携わっている者の誇りと意欲を増進させ、能力と資質の向上を促進するとともに、その社会的評価・地位の確立を図り、建設業の健全な発展に資することを目的としている。

授賞式に先立って挨拶した石橋林太郎 国土交通大臣政務官は、「建設マスターの方々は、まさに“モノづくり、人づくりの名人”と称するにふさわしい方々であり、建設ジュニアマスターの方々は建設の現場において、今後さらなる活躍が期待される。皆様のご尽力と皆様を支えてきたご家族、会社の皆様に心から敬意を表しますとともにお慶びを申し上げる。皆様の益々のご活躍を祈念する」と述べた。続いて選考委員を務めたマリ・クリスティーン氏は「建設マスター、建設ジュニアを受賞された方が建設技能者の目指す姿となり、技術や技能の伝承に務めていただ



くことは建設技能者の社会的地位や評価を高めるとともに、将来的に優秀な人材の確保にもつながるもの。建設マスターとして2名、建設ジュニアマスターとして4名の女性が顕彰され、女性の建設技能者の活躍は、建設現場の環境や働き方の改善にも役立つ。この受賞を機に今後のさらなる活躍を期待する」と述べた。

顕彰式では建設マスター452名と建設ジュニアマスター121名の代表者に顕彰状が授与され、代表者が受賞の言葉を述べると会場は盛大な拍手に包まれた。

建設マスターを3名が受賞

今回、木住協が推薦した会員企業3社に所属する3人の大工が建設マスターに、同じく会員企業3社に所属する3人が建設ジュニアマスターとして顕彰された。建設マスターとして顕彰されたのは、外谷力〔一人親方〕さん、豊田泰丈さん〔一人親方〕、中村幸司さん〔一人親方〕の3名。外谷さんは住友林業ホームエンジニアリング（株）の社員大工のチーム



リーダーとして後輩の指導育成に貢献。請負大工職として独立後も施工大工の立場から施工、現場環境の改善点を建議するなど、アフターメンテナンス削減にも大きく貢献。施工品質の良さはもちろん、施主への親切な対応など各方面からの信頼も厚い。



豊田さんは主に住友林業を元請けとする一人親方で、納まりなどお客様目線での施工を大切に、特殊な納まりでもキレイに納め、床の割り付けなども小割が発生しない施工が特徴。さらに現在までに弟子を2名育成し、一人は一人親方として独立するなど後進の育成にも励む。いつも現場は整理整頓され、仕事も手早く丁寧なため、こだわりの強い物件も安心して任せられるなど、お客様や関係者の評も高い。

中村さんはポラテック(株)に所属する400人以上の大工の中でも、最も優秀な施工者の一人で、お客様からの感謝の声も多い職人。1993年にポラスグループに所属して以来、個性的な物件や高い技術を擁する物件などを中心に、127棟以上の物件を手がけたという。その確かな仕事ぶりは同社独自のお客様満足施工証、さらにお客様満足度調査において最優秀賞3回、優秀賞3回を受賞していることから分かる。さらにポラスグループを退職・独立後はハウジング匠会で会長などの要職を務めるなど、現場の安全・施工技術の向上や後進の育成に努めている。

建設ジュニアマスターは3名が受賞

建設ジュニアマスターとして顕彰されたのは、近藤大樹氏[ポラスハウジング千葉(株)]、佐藤翔太[一人親方]、松尾誠一氏[住友林業ホームエンジニアリング(株)]の3人。近藤さんはポラスハウジング千葉の大工職の中でも最も技能や技術が優秀な施工者の一人。常に納期を念頭に作業工程を決め、安全を優先しつつも期日までに仕事を確実に完了させる。また「現場は展示場」という気持ちを常に持ち、現場の5Sを徹底し、作業時の服装にも気を配っている。お客様をはじめ、現場パトロールにあたる安全担当部署からの評判も高く、技能の継承を含め、他の施工者の模範となっている。

佐藤さんは大手建設会社で7年間務めたのち独立。現在は住友林業(株)の現場を中心に一人親方として数多くの現場を手がけている。若いながらも丁寧で確かな技術があり、アフターメンテナンスが発生しない工夫をするな



ど、常にお客様に寄り添った施工を心掛けている。また作業開始前のKY活動を行ってから作業に取り組み、現場は常に整理整頓され安全で施工性の高い現場を心掛けるなど、今後に期待できる大工である。

最後に松尾さんは、住友林業ホームエンジニアリング(株)の大工職人で、非住宅(中大規模)分野における木造建築物など、高額高難易度の物件を数多く施工し、その経験から自らの仕事量だけでなくチーム員の力量、業者のタイミングなどを加味して工程計画を組むことで、工事の進捗がズレなく進行。現場の効率や手持ちの無い合理化活動(工期短縮)にも大きく貢献している。現在はリーダーとして自チームの若手大工の指導育成を実施しているが、今後はそのリーダー自体を育てる役割が期待されるなど、後に続く若手リーダーの見本となっている。

会場が拍手で包まれた作文の朗読も

続いて受賞者のお子さんから「ぼく・わたしから見たお父さん・お母さんの仕事」と題した作文が紹介され、壇上にて父親を前に父親の仕事への尊敬の念や感謝をつづった作文が朗読されると、会場はあたたかな拍手に包まれた。

さらに、建設産業への熱い想いを伝えるとともに、一般の方へ建設産業の役割や重要性について理解と関心を高めてもらうための作文「私たちの主張～未来を創造する建設業界～」と、建設産業の仕事をより身近なものに感じていただくために、高等学校の建築学科、土木学科等で学ぶ生徒を対象とした「高校生の作文コンクール」の優秀作の表彰式も実施された。

「私たちの主張～未来を創造する建設業界～」では稲穂建設工業(株)の佐々木ゆのかさんによる作品『魅力に気づく瞬間』と、「高校生の作文コンクール」では静岡県立浜松工業高等学校 建築科3年の鈴木和弥さんによる作品『笑顔のあるコミュニティ再生を、建築の力で』の国土交通大臣賞受賞作品が本人によって読み上げられ、建設業界の知られざる魅力や将来への希望が語られ、大きな拍手とともに閉会した。

環境に配慮した木造住宅で 地域社会のしあわせづくりに貢献する

ヤベホーム株式会社（長崎県）

Interview

JR長崎本線諫早駅西口正面大通りに面した一画に7階建てのヤベホーム本社ビルがある。1988年11月に有限会社として諫早市に設立してから地元一筋36年、矢部福德社長は「本当に健康で幸せな住まい」への挑戦を続けてきた。

2010年に「笑和な家」モデルハウスをオープンすると、高温多湿な長崎の気候にあった県産材や国産材を用いる地産地消にこだわり、構造材無垢の木や漆喰といった調湿性能のある自然素材を厳選した「健幸長寿な住まい」への提案が高い反響を呼んだ。これと並行して、環境に配慮した森づくりプロジェクトとして「ヤベホームの森 森林ツアー」を開催し、2014年環境省カーボン・オフセット大賞優秀賞、さらに2018年長崎農林業大賞 特別賞を次々と受賞した。

健康・長寿な木造住宅づくりで地域社会の信頼が厚い矢部福德社長に、創業の思い、事業内容、今後の目標などについて伺った。

代表取締役
矢部 福德氏



国産木材の調湿性能が 健康な住環境を もたらす

矢部福德社長は、島原半島の千々石町(現・雲仙市)生まれ。実家がアルミサッシ取付け業をしていたため、地元

の高校を卒業すると兄を手伝って住宅関連の仕事を経験することとなる。24歳で結婚、26歳で長女が生まれる。「実は、私の娘は生まれながらの障害をもっていました。娘の入院を繰り返すなかで、家族の幸せづくりのための住宅会社を創業して、社会へ貢献したい

という想いを抱くようになりました」。

家族で諫早市に引っ越して、1988年に有限会社ヤベホームを設立した。当初は、毎日200軒ほど飛び込み営業をして、修理や小さなリフォーム工事をしていたそうである。

「娘は、酸素を十分に吸うことができな



湿性能こそが重要である。国産木材の持つ「調湿」により、夏の湿潤でジメジメしたときも、冬の乾燥でカサカサしたときも、家の中を勝手に「調湿」してくれる。

ヤベホームの「健康長寿な住まい」は、対馬産ヒノキをはじめとした国産木材の調湿性能を生かし、高千穂のシラス壁や漆喰といった自然素材にこだわることで、健康的な住環境をもたらすという確信から生まれたものであった。



い低酸素脳症で、病院の行き帰りにクルマの中で呼吸苦に陥りました。そんな折、間伐された森に連れていくと、酸素が吸いやすいのか、次第に顔に赤みがさしていくのがわかりました」。

森の新鮮な空気であれば、娘は呼吸してくれる……。この出来事が、矢部社長のめざす「本当に健康で幸せな住まい」づくりへのヒントになった。2003年に株式会社へと組織変更を行うと、独自の注文住宅のプランづくりに着手、2010年に「笑和な家」モデルハウスを、木のこひろば展示場にオープンした。

高温多湿な長崎の気候においては、ヒノキをはじめとした国産木材の調

環境への貢献姿勢が 住宅販売の 業績アップを促す

同時に、矢部社長には創業当時から決めていたもう一つのプランがあった。それは、経常利益が1,000万円を超えた時点で、利益の5%を社会に還元するというものであった。2013年に環境に配慮した森づくりプロジェクトがあることを知り、翌年より「ヤベホームの森

森林ツアー」を毎年開催することにした。これは、「ヤベホームの森」で植樹や間伐体験をしてもらい、地球温暖化防止と森林整備の大切さを学んでもらうものである。

こうした環境への貢献が、会社経営の面でも意外なカタチで実を結ぶことになる。なんと、住宅販売における契約率が大きくアップした。

「住宅を購入される際、お客様は初めに10社程度を見学して、そこから大体3社に絞り込んで見積りや図面を依頼するケースが多いのですが、当社がこの3社に選ばれることが確実に増えました。お客様に『会社の利益の一部を森林整備に使わせていただいております』と説明すると、それが口コミで広がり、環境問題に意識の高いお客様の来訪に繋がっていきました」。

2014年環境省カーボン・オフセット大賞優秀賞、2018年長崎農林業大賞特別賞を次々と受賞したことも追い風になったのである。また直近では、森林×ACTチャレンジ2024林野庁長官賞（優秀賞）を受賞。カーボンニュートラル



社会の実現への環境貢献が評価された。

2024年10月現在の社員数は10名。建築営業3名、設計3名、現場監督1名、リフォーム2名。社長を含めても男性は3名で、あとの7名は20～40歳代の女性であるという。「住む方の健康で幸せな暮らしを願い、自然素材の優しい住空間をつくる」ヤベホームの家づくりの姿勢は、女性社員たちによって支えられていると言ってよい。また、「お引渡しからがほんとうのお付き合い」をモットーに30年間無料点検などのアフターサービスに力を入れ、多くのOB施主様に安心と喜びを提供している。

木住協に加入したのは、15年ほど前に省令準耐火の優遇制度の活用がきっかけであると言う。「木のある暮らし作文コンクール」では、地元・諫早市の小学生に作文募集を呼びかけて、ヤベホーム独自の作文集を編集・製作したこともある。

めざすは しあわせづくりの 「オンリーワン企業」

ヤベホームの将来像についてもお話を伺った。現在は、木造注文住宅の設計施工とリフォーム工事が二本柱ですが、これからは中古空き家のリノベーションによる不動産事業にも力を入れていきたいと語る。地元で新しく家を建てる新世代ファミリー、夢を求めて移住してくる若者たちにとっての健康で幸せな住環境を積極的に提供していきたいとのことである。



「商売は『笑売』……というのが私のモットーです。お客様が笑顔になり、働く人が笑顔になり、家族や周囲の人たちが笑顔になるために、時代に応じて幸せづくりをするのが使命です。今は住宅会社をやっていますが、これからの時代にさて何をすべきか、自在に突き進んで行ければよいと思っています」とのことであった。

趣味は、週一回水曜日の休日に出かけるゴルフだったが、最近は「ながさきカーボン・オフセット推進協議会」会長や長崎大学環境科学部非常勤講師の仕事などの社会活動で埋まってしまう、なかなか出かけられないとのこと。「朝のウォーキングと、たまに行きつけの居酒屋でのひとり酒がリフレッシュ法」とのことであった。

創業から36年、地域社会に貢献する「小さくても輝くオンリーワン企業」を目指して、無借金経営の身の丈に合った挑戦を続ける矢部福徳社長、66歳にしていますますの活躍が期待できそうである。



Company Profile

【会社概要】

ヤベホーム株式会社
代表取締役 矢部 福徳
所在地 〒854-0072
長崎県諫早市永昌町10番14号
TEL 0957-25-3188

【会社沿革】

- 1988年11月 有限会社ヤベホーム設立
- 2002年 6月 旧社屋落成
ヤベホーム設立15周年
- 2003年 8月 有限会社から株式会社へ組織変更
- 2008年 2月 「平屋のすめ」時津モデルオープン
- 2010年11月 「笑和な家」モデルハウス木のコトひろば展示場にオープン
- 2014年 4月 第1回ヤベホームの森
森林ツアー開始
- 6月 「ヤベホームの森」環境省カーボン・オフセット認証取得
- 12月 「第4回カーボン・オフセット大賞」優秀賞を受賞
- 2018年 6月 空き家相談窓口としてグループ法人「空き家、相続相談センター」開設
- 12月 長崎農林業大賞 特別賞(住宅業界で初の受賞)
- 2019年 6月 「一般社団法人 ながさき住まいと相続相談センター」に名称変更
- 2021年10月 ながさき環境県民会議最優秀賞受賞
- 12月 新社屋 Y's station 落成
- 2022年 4月 ヤベホーム株式会社 設立35周年記念式典「感謝のタベ」
- 2024年 4月 「平屋+（プラス）」新モデルハウス栄田町に完成オープン
- 10月 森林×ACTチャレンジ2024林野庁長官賞(優秀賞)受賞

【事業内容】

住宅の設計及び施工・リフォーム・不動産 相続コンサルティング事業



ピカイチ社員



ハウジングコーディネーター 山添 礼さん

Q.入社経緯と 現在の業務内容は？

2011年4月の新卒入社です。地元の大村工業高校建築科を卒業後、福岡の専門学校で二級建築士の資格を取得しました。福岡の住宅会社の就職も考えましたが、実家からクルマで通勤できるので、ヤベホームへ入社しました。約9年間は新築戸建てのお客様の担当をしていましたが、2018年に結婚して、男の子女の子の二人の子供が



生まれたので、産休や育児休暇の期間もあり、今は諫早駅前の本社事務所の内勤で、リフォームやメンテナンスといったお客様への対応をはじめとして、住宅にかかわる諸々のフォロー業務を行なっています。

Q.うれしかったことや 成功事例は？

入社3～4年で必死に働いていた頃に、諫早市山川町で若いご夫婦の新築住宅を担当しました。共働きでとても忙しいお二人でお引き渡しの時もあまりお話する機会がなかったのですが、二年目点検でひさしぶりにお会いした際に「やり取りがスムーズで何の心配もなく建てることができました。山添さんに担当してもらって本当に良かった」と言われた時はとてもうれしく、この仕事をやってきて良かったなと感じました。

Q.家族との時間の 過ごし方は？

夫と4歳の息子、2歳の娘との四人

暮らしです。休日は、近くの溪谷や森に出かけて、小川でメダカや小さなエビを獲ったり、草むらにいるバッタやカメムシを獲ったりと、自然に触れ合って遊ぶことが多いです。息子はなぜかカマキリが好きで、私はこわくて触れないのですが、夢中になって餌を与えています。

Q.ご自宅もヤベホームで 建てられたと伺いましたが？

そうです。矢部社長にお願いして、四年前に家族で住む自宅を新築しました。これまでお客様に提案してきた自然素材の住まいの良さを、日々の暮らしを通して体感しています。家族で出かけて玄関の扉を開けた時、かすかに木の香りを感じて癒されます。ヒノキの床材のリビングで遊ぶ子供達の元気な姿を見ると、社長の「健幸な家」という言葉を思い出します。住んでいるからこそわかるこの家の心地よさを、これからお客様に伝えていきたいと思っています。

ヤベホーム株式会社のこだわりPOINT

「自然素材」や「国産材」など素材を厳選して
健幸・長寿な住まいづくりに挑戦し続ける

社長のひとこと

長崎の地域社会のしあわせづくりに貢献し
「小さくても輝くオンリーワン企業」を目指す



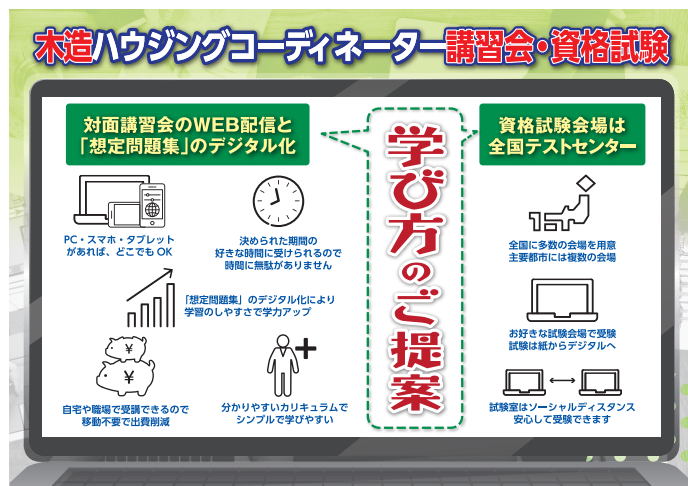
第11回森林ツアー

「木造ハウジングコーディネーター 資格試験講習会」を実施

— 研修企画推進部 —

木住協では、2024年度木造ハウジングコーディネーター資格制度の講習会を9月に実施した。この資格制度は、理想の住まいをコーディネートできる住宅営業職・技術職の人材育成を目的とするもので、2001年度より継続して実施し、今年で24回目。資格取得者は延べ7,130人となる。試験に先立つ講習会は、対面講習会（大阪・名古屋・東京）とWEB講習会を併せて開催。木造住宅営業の基本から、設計・施工にわたる知識を広く学ぶものである。資格試験は12月に全国テストセンターにおいて、デジタル試験が実施される。

対面型の講習会は、大阪、名古屋、東京の3会場で、約50名が営業と技術を2日間にわたり学んだ。そして東京会場の講習会はWEB配信され、自宅や職場でも受講できる。また、「テキスト」「想定問題集」のデジタル化によって、学習がしやすくなり学力向上が期待できる。会場では、こ



れからの木造ハウジングの発展を担う若い方々の参加が目立ち、皆さんの学習意欲が感じられた。講習はテキストの他に、グラフや図表を大型画面に映して講師が説明。営業科目の講習では、講師が自分の営業経験からトーク例

を挙げながら、引き込まれるようなテンポの良い講義で説明が進んだ。「試験に出がちな項目」と講師が強調する内容説明では、皆さん真剣にメモを取り、マーカーでチェックする姿が見受けられた。

受験を通して、プロとしての総合力アップ

木造ハウジングコーディネーターの受験を通して、お客様に満足いただける営業スキルと高い知識力を身につけることができます。

営業スキルアップ

- Point 1** お客様との信頼関係の築き方を修得できる
ヒアリング能力やプレゼンスキルも上進することができるので、より円滑に次のアポイントに繋げることができます。
- Point 2** 家づくりの全工程を学ぶことができる
プランニングから引き渡し、アフターサービスまで、家づくりのすべての分野において、お客様をサポートすることができます。
- Point 3** ワンランク上の提案力が身につく
間取りやインテリア、設備・機器など幅広く学ぶことができるため、お客様のライフプランを取り入れた家づくりを提案することができます。

1.営業編テキストで学べるもの

- ヒアリング商談の進め方
- 住宅の平面・意匠計画
- 住宅設備機器の選択



2.技術編テキストで学べるもの

- 工法の種類・施工の手順
- 住宅に使われる材料
- 住宅技術の基礎知識



知識力アップ

- Point 1** 木造住宅に関する知識が幅広く向上
木造住宅の耐震性・耐火性・耐久性の高さや木質空間のメリットをはじめ、木造住宅に関して総合的に学ぶことができます。
- Point 2** 技術者としての専門知識を深めることができる
設計に関する技術的な専門知識を身に付けることができるため、より深くお客様の希望を汲み取ることができます。
- Point 3** 法制度や時代のニーズを把握できる
お客様にとっては難しい、法律や税制といった国の最新動向や時代のニーズをわかりやすく説明できる知識が身に付きます。



支部との連携強化を目指した 情報交換会を実施

支部・本部との更なる連携関係を構築

全国各地の木住協支部と木住協本部事務局との連携・意思疎通の強化を目的に、現在、『支部・本部情報交換会』を実施中。中部支部(8月22日開催)を皮切りに、北海道支部(8月26日)にて開催。順次、各支部にて実施していく。

情報交換会では、各支部長、加藤永専務理事の挨拶の後、本部・支部各々の「活動状況」について報告。本部事務局からは改めて各部の業務のポイントや役割を説明。その中で「作文コンクールへのご協力のお願い」「応急仮設住宅の展開(全国の動向、能登半島の現状・地元自治体との関係など)」「研修企画推進部で議論している新セミナーなどへの意見提示のお願い」「国産材活用調査アンケートへのお願い」などの最新の取組み情報を報告した。

支部からは、地域の景況や課題、最近の話題、会員の状況など、幅広い意見をいただいた。地域の景況や課題では、企業進出による経済見込み、建築需要の変化とその活用、郊外型団地の空き家問題など地域の実情について情報をいただいた。

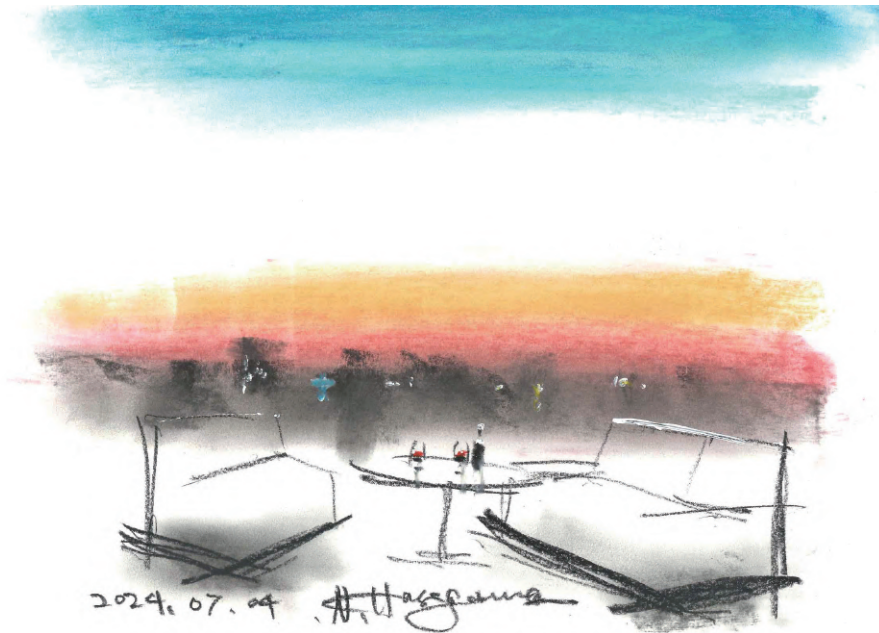
また、今後の協会活動に対しては、

- 「木造建築」への評価を高め、国産木材の活用を進めるべきだが、消費者のコスト優先への行動をどう変えていけるか課題(中部)
- 以前に比べて木造建築(大型非住宅木造案件など)の話題が減っているのでは？(中部)
- 窓断熱リフォーム補助金の動きは、昨年に比べて遅い。北海道のサッシの断熱性能はすでに高いがガラスの性能が課題。既存住宅は窓よりも外壁や床の断熱性能が問題だがコストが課題(北海道)
- 新築の断熱性能は既に等級5が8割、等級6が半分以上で、差別化のための等級7を目指す会社もでてきている(北海道) などの意見をいただいた。

本部としては、これらのいただいた情報・意見を活用し、支部との連携のもと更なる会員サービスの向上と取組みの充実を目指していく。



「営業提案最前線」 ～顧客の心を動かす～ 「商談に使えるスピードスケッチセミナー」 【会員限定】無料受付中



講師プロフィール

グラフィックデザイナー 長谷川 矩祥氏
1964年日本楽器製造（現ヤマハ）入社
国内外の様々なアーティストのギターをデザイン
2005年デザイン・ハセノリ設立
空間プランナー、インテリアパース、スケッチ等
研修講師の分野で活躍中

最近ではパソコンを使ってお客様との打合せに臨む営業もあります。コンピュータのすぐれたところはたくさんありますし、今後、ますますコンピュータの利用は増えていくと思います。

ただし、接客現場ではコンピュータもいいのですがもっとお手軽で簡単でより効果的な鉛筆一本で出来る「手描きスケッチ」によるコミュニケーション営業を推奨したいのです。

コミュニケーション営業は話すことより、まず、しっかり聞くことが大切です。しっかり聞き取れたかどうか、聞きながらのスケッチを重視します。お客様も自分で話したことが、その場で絵になっていくので、わかりやすく安心だということで信頼につながります。

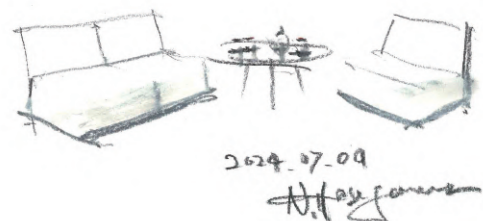


住宅は空間

住宅は平面ではなく空間なので空間は立体的に表現しないとわかりにくいからです。同じ間取りでもお客様によっていろいろな生活の仕方が違ってきます。平面図面の商談だけではお互いのイメージの食い違いが出てきます。

住まい手とのギャップ？

一般の方々に自分の理想の住まいを絵に描いていただくと、もちろん大多数の方々は、絵も図面も苦手、それでも一生懸命描いていただきました。ある方の図面にはダイニングテーブルの上に食べ物やカップなどが描かれていたり、リビングに床にイヌが寝転がっていたりします。まったく施工とは関係のない暮らしの情報が一杯つまっているのです。今までの図面は施工のため、家を建てるためのもの。ところが一般の方の図面はこれからの暮らし、生活のイメージが図面に描かれているのです。

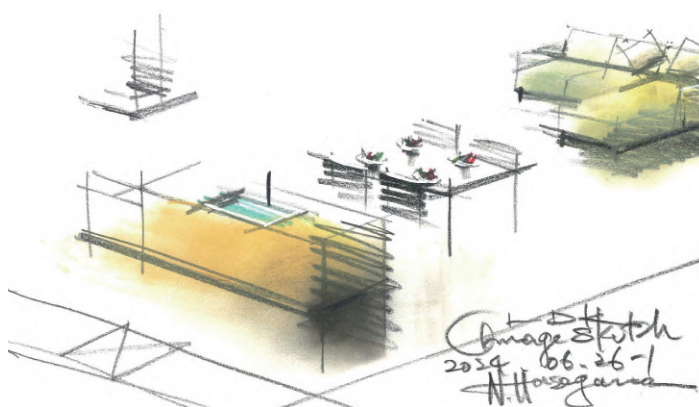
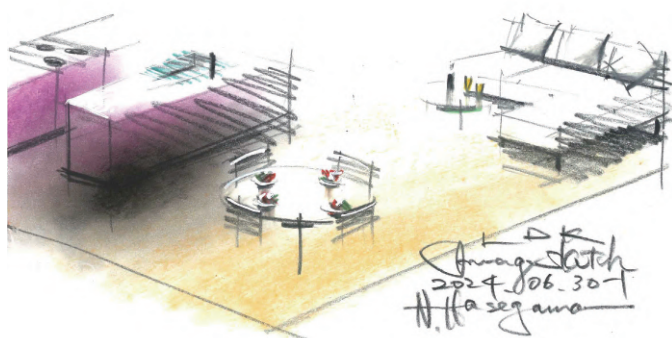




スピードスケッチセミナーのポイントは二つ

「省略」と「標準」です。

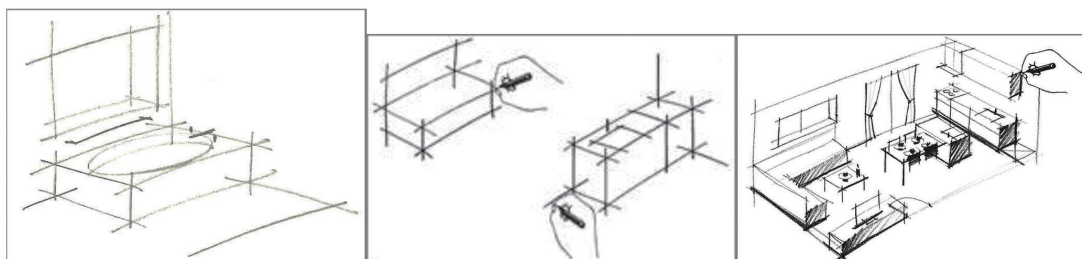
「省略」とは、いかに余分な線を省いて描くかです。早く上げるには手を速く動かすことではありません。「標準」とは、例えば「椅子」を描くときに世の中の人のイメージする標準的な「椅子」が描けると便利です。まずはお客様の好みなどが分からない段階、打合せの初期の段階では悩まずに絵が描ければ「早く」描き上がるはずで



■ 初中級編：住宅営業職向け

スケッチの基本を学びます。

例えば、浴槽(パーツ)を簡潔に描き、それをほんの数秒で浴室(空間)に展開させる早業を伝授します。ポイントは「いかに省略するか」です。

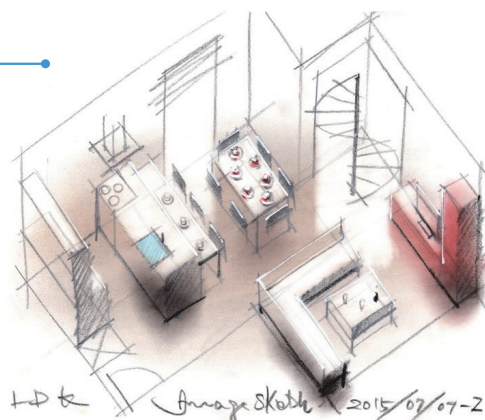


■ 中上級編：ある程度のスケッチが出来る住宅設計職向け

初中級編にて行ったスケッチに色や影を入れて、より完成度の高いものに仕上げていくセミナーです。

パステルを使って着色を施し、光と陰の表現方法を学びます。

ある程度のスケッチ経験が必要となります。



資材・流通委員会が見学会を開催 「檜原村森林 -MOKKI NO MORI- 視察」

日本の森林の現状と課題、木の魅力と尊さを実感

資材・流通委員会(入山朋之委員長)は10月23日、令和6年度第1回目の見学会を行い、東京・檜原村にある林業会社「東京チェーンソー」の社有林、同村で製材業などを営む「野村材木店」、そして檜原村で育った木材を活用した「檜原森のおもちゃ美術館」を見学した。見学会は日帰りで行われ、参加した20人の委員は木を育てている森林、そして森林で伐採された木を加工する製材の現場、そして木材を利用している美術館という、地域内で木材が有効活用されている現場を見学し、改めて木という素材の魅力と尊さを実感した。また、一方で現在の森林や林業が抱える問題も提示され、今後木材の利用を促進するにあたり、多くの課題に取り組んでいかねばならないことを再認識した見学会となった。

当日の朝、JR武蔵五日市駅に集合した一行は、まずバスに乗り檜原村にある「東京チェーンソー」の社有林へと向かった。

東京都の西部に位置する檜原村は東京都の島しょ部を除く本州内にある唯一の村。総面積の93%が林野という自然豊かな地であり、その大部分が秩父多摩甲斐国立公園に含まれている。そしてこの檜原村に拠点を置く「東京チェーンソー」は東京都と埼玉県との認定を受ける林業事業体で、2006年に創業。現在社員は約30名おり、檜原村にある140haの自社保有林のほか、他市町村の森林も請け負って管理している。

また、そうした従来型の林業に加え、柔軟な発想のもとに森と木に新たな価値を加える事業も多数展開している。例を挙げると、利用価値がないとされてきた根株や枝などの“森のヘンテコ素材”も販売する「1本まるごと販売」、木育・木工・アウトドア体験の出張ワークショップ「森デリバリー」、会員が同社のフィールドを時間や回数の制限なくキャンプなどに利用できるサブスクリプションサービス「MOKKI NO MORI」などがあり、「森デリバリー」は2022年にウッドデザイン賞の優秀賞も受賞し



「東京チェーンソー」社有林より、檜原村の豊かな自然を望んでいる。

森林に付加価値を加える 「東京チェーンソー」の取り組み

一行は観光名所として知られる払沢の滝の上流にあるフィールドエントランスにて降車。ここで檜原村に広がる広大な森林を眺めながら「東京チェーンソー」の執行役員、吉田尚樹氏によるオリエンテーションを受けたあと、整備された作業道を歩いて社有林の中へと向かった。あいにくの小雨模様だったが、針葉樹だけでなく広葉樹も育つ森は美しく清々しい空気に満ちていた。

各所で吉田氏の説明を聞きながら数十分森の中を歩き、社有林内にある「森のラウンジ」に到着。ここで吉田氏より事業の内容や、森や林業に対する考え方についてより詳しい説明を受けた。

現在、日本の森林は過去最大といわれるほど体積が増えているにもかかわらず、木材の自給率は上がりず林業従事者は減少し続けている。そして間伐などの手入れがされず日光が林床に届かない不健全な森が増え続けた結果、経済的に価値がない木ばかりが育ち、さらに森の価



「森のラウンジ」にてレクチャーを受ける



今回案内をいただいた「東京チェンソーズ」の吉田尚樹氏



「野村材木店」にて、丸太を角材に製材する作業を見学

値が下がってしまうという悪循環が起きている。

吉田氏は、このように日本の森が経済林としての機能を失いつつある現状の中で、森の価値を可視化し最大化していくために、数々の取り組みを行っていると説明。しかし、もはや森での活動だけでは問題は解決できない状況になっており、企業、個人問わずより多くの人々と一緒に問題を考えていきたいと話した。委員たちは、こうした吉田氏の説得力ある解説に熱心に耳を傾けていた。

また、質疑応答では世界基準の森林認証を取得している認証に対する考え方や、人材確保の方法、ITの活用法など、さまざまな質問が出て意義深い時間となった。

「野村材木店」で製材作業を見学し 遊び心あふれる「檜原森のおもちゃ美術館」へ

「森のラウンジ」で昼食をとった後、一行は同じ檜原村にある「野村材木店」を訪れ製材作業を見学した。

同材木店でこの日行われていたのは、80年生のヒノキの丸太を55角の材に挽く作業であった。バンドソーによって瞬間に長い丸太が板材に、そして角材に挽かれていく様子は迫力十分。機械を使う作業とはいえ一本一本素性が異なる丸太をまっすぐの材に挽くには優れた技術が必要であり、委員たちは職人の無駄のない動きと熟練の手業に見入っていた。



木がふんだんに使われた「檜原森のおもちゃ美術館」の館内



たまご型の木が無数に敷き詰められたたまごリバー

そして一行が最後に訪れたのは、特定非営利活動法人東京さとやま木香會が運営している「檜原森のおもちゃ美術館」。ここは檜原村で育った木材をふんだんに使って建てられた体験型美術館で、木の香りに満ちた館内には触れて遊べる木のおもちゃが数多く展示されていた。

木造2階建の建物は、延床面積およそ980㎡で、ヒノキ、スギ、サワラといった多くの地産材を使用している。卵形に削った木を敷き詰めたたまごリバー、枝付きの磨き丸太が何本も立つ森ひろば、太い丸太を組み合わせて建てられたログハウスといったユニークな遊び場のほか、世界各国のおもちゃが並ぶ展示広場や地元の特産品を使った料理が食べられるカフェもあり、子供はもちろん、大人も童心に返って楽しめる施設であった。

そして、この美術館見学をもって日程は無事終了。入山委員長の挨拶の後、散会となった。



美術館前にて記念撮影



松本城

長野県



全国各地に現存する名城は、築城された時代や地形によって様々な外観を持っており、天守閣、櫓、御殿、鎧門など城郭建築についても興味深いものがある。今回は、「漆黒の城」として壮麗な天守群が現存している国宝・松本城についてご紹介しよう。

天守・櫓が絶妙なバランスで連結する 「漆黒の城」

「松本城」は、信濃国松本盆地にある周囲を水堀に囲まれた平城である。大天守、乾小天守、渡櫓、辰巳附櫓、月見櫓の五棟が絶妙なバランスで連結しており、天守群の美しい景観で知られている。松本城の特徴は「漆黒(しっこく)の城」である。漆喰壁に板を張り、防水効果のある漆を塗ったもので、豊臣秀吉の趣味を反映したものとされている。

16世紀に信濃守護の小笠原氏が築城した深志城が前身であり、豊臣秀吉が小



田原征伐の後、関東に移封された徳川家康を監視するため、家臣の武将 石川数正・康長父子に命じて、文禄2～3年(1593～94年)にかけて築城したのが、現在の松本城である。この時、建てられたのが、大天守、乾小天守、渡櫓で、一階二階の壁は30センチに近い分厚いもので、鉄砲狭間、矢狭間、石落としなどが多数配置され、戦闘に備えた頑丈な造りになっている。

関ヶ原の合戦の後、徳川家康が天下を取ると、家康の孫松平直政が松本城主となる。この直政は、善光寺に参拝する三代将軍 家光を接待する目的で、幕府の許しを得て、新たに辰巳附櫓、月見櫓を増築する。月見櫓は、朱色に塗られた延縁が優雅な趣きの櫓で、板戸をはずすと三方面の開口部が吹き抜けとなり、その名の通り月見を楽しむことができた。造られた時代によって、趣きの違う天守や櫓が複合・連結しているのが、松本城の特徴と言える。

壮麗な姿で聳え立つ 日本最古の五重六階大天守

「松本城」の注目は、五重六階としては日本最古の大天

守であろう。天守最上層の屋根は、壮麗な入母屋造りで、屋根の頂きの両端に鯢瓦(しゃちがわら)が取り付けられている。破風は、三重目南北面が向唐破風に出窓が付いており、三重目東西面と二重目南北面が千鳥破風となっている。また、一重目には袴形の石落としがあり、窓は突上窓である。

大天守の内部は、一階が武者走りに取り囲まれた板間が一段高くあり、床下が建物全体の土台となっている。二階は三連・五連の堅格子窓でここから火縄銃を撃ったと考えられている。三階は二重目の屋根が周囲を巡って設けられているため窓がなく、隠し階、暗闇階

と呼ばれている。戦時には倉庫や避難所として使うことを想定したものと思われる。四階は御座所と呼ばれ、城主が天守に入った時にはここに座したとされる。三間×三間の広さで、小壁をおろし、内注長押を廻らしている。五階は戦時に重臣たちが作戦会議を行う場所で、東西に千鳥破風、南北に向唐破風があり、武者窓から全方位が見渡せる。六階は神処であり、二十六夜神が鎮座している。月齢26日の月をここから拝む月待信仰で城の安寧を願ったものと思われる。

このほか、「松本城」には、水堀に映える石垣、太鼓門や黒門、二の丸御殿跡、本丸御殿跡など、見どころが多い。

「松本城」 国宝 現存天守

天守構造別名	連結複合式望楼型五重六階 深志城
城郭構造	平城
建造主	石川数正・康長
建造年	文禄2～3年(1593～94年)
所在地	〒390-0873 長野県松本市丸の内4-1
電話	0263-32-2902(松本城管理事務所)
開館時間	午前8時30分～午後5時
休館日	年末年始(12月29日～1月3日)
入館料	大人610円 小・中学生300円

税務談話室

令和7年度住宅に関連する税制改正

顧問税理士
(税理士法人 下平・櫻井事務所 所長)
下平達夫



1. 住宅ローン減税

令和6年の税制改正において、現下の急激な住宅価格の上昇等の状況を踏まえ、子育て世帯に対する住宅ローン控除の拡充の特例を創設し、令和7年の税制改正においてこの特例について方向性を検討するとしていましたが、方向性の検討については来年度以降行うこととなりました。令和7年の要望については昨年と同様のローン控除限度額を1年間延長すること、また、子育て世帯においては、住宅取得において駅近等の利便性がより重視されること等を踏まえ、新築住宅の床面積要件について合計所得金額1,000万円以下の者に限り40㎡に緩和することを要望しています。

現行の子育て世帯ローン控除

住宅の種類	借入金限度額(万円)		控除期間(年)	床面積(㎡)
	(R6.12.31まで入居)	(R7.12.31まで入居)		
認定住宅	5,000	4,500	13	50
ZEH水準省エネ住宅	4,500	3,500		
省エネ基準適合住宅	4,000	3,000		

要望案

住宅の種類	借入金限度額(万円)	控除期間(年)	床面積(㎡)
	(R7.12.31まで入居)		
認定住宅	5,000	13	40
ZEH水準省エネ住宅	4,500		
省エネ基準適合住宅	4,000		

2. 買取再販住宅に係る不動産取得税の特例措置の期限延長

(1) 制度の内容

① 概要

買取再販で扱われる住宅及びその敷地のうち一定の質の向上(耐震、省エネ、バリアフリー、水回り等のリフォーム)を行った後、個人の自己居住用住宅として譲渡するものについて、不動産取得税(宅地建物取引業者の取得に係るもの)を次のとおり減額する。

住宅部分 築年数に応じて一定額を減額(最大36万円)

敷地 対象住宅が「安心R住宅」等一定の場合に、次のイ又はロのいずれか高いほうの金額が税額から減額されます。

イ. 45,000円

ロ. 「土地1平方メートル当たりの価格」×[住宅の床面積の2倍(一戸につき200㎡を限度)×3%

②現行の適用期限

令和7年3月31日

(2)要望案

ノウハウのある事業者が質の向上を行っていることが、消費者に安心感を与え、既存住宅流通・リフォーム市場の活性化に大きく寄与する。又、空き家の有効活用にも有力な手段となるため、本特例措置の延長は必要である。そのため適用期限を令和9年3月31日まで、2年間延長することを要望する。

(3)登録免許税の特例措置との関係

買取再販住宅に係る登録免許税の特例措置については、令和6年税制改正により、適用期限が令和9年3月31日まで延長されています。

3. サービス付き高齢者向け住宅促進税制の延長

(1)制度の概要

高齢者が安心して暮らせる住まいの確保が求められる中、バリアフリー化され、状況把握サービス等が提供されるサービス付き高齢者向け住宅の供給を促進するため、新築のサービス付き高齢者向け住宅については、次のとおり特例があります。

①不動産取得税

家 屋 課税標準から1戸につき1,200万円を控除

土 地 次のイ又はロのいずれか高いほうの金額が税額から減額されます。

イ.45,000円

ロ.「土地1平方メートル当たりの価格」×「住宅の床面積の2倍（一戸につき200㎡を限度）×3％

②固定資産税

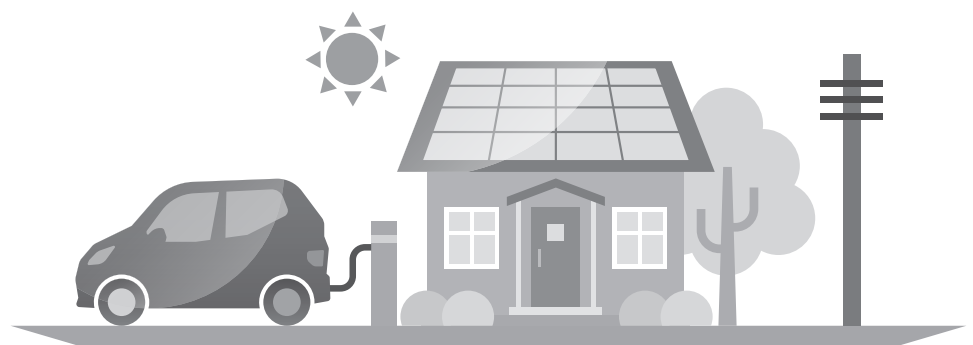
1戸当たり120㎡を限度に最初の5年間の固定資産税額を、3分の2を参酌して2分の1以上6分の5以下の範囲で市町村が条例で定める割合で減額する。

(2)現行の適用期限

令和7年3月31日

(3)要望案

高齢者世帯の増加が今後も見込まれる中、高齢者向け住宅の整備、とりわけ、バリアフリー化された、サービス付き高齢者向け住家の供給の促進策が必要であり、その適用期限を令和9年3月31日まで2年間延長することを要望する。



市川会長・支部長懇談会 開催

懇談会テーマは
「木の良さ・木造の良さをもっと知ってもらう取組について」

10月26日(土)の「木のある暮らし 作文コンクール」表彰式に先立って、アルカディア市ヶ谷 私学会館(東京都千代田区)にて市川会長を囲んでの支部長懇談会が開催された。

懇談会の冒頭に、木住協本部事務局より「木造住宅の普及を通して、炭素固定・森林循環など脱炭素・温暖化対策に寄与するためには、業界関係者のみならず、消費者に『木の良さ・木造の良さ』を理解していただくことが重要である。このために、どのような取組が有効なのか、お知恵をいただきたい」との主旨説明があり、この後、全国から参加された各支部による意見交換が行われた。

印象的だったのは、北陸支部で「能登半島地震や豪雨災害の被災地映像を見て『木造は弱い』という誤解が広がっているように思われる。この懸念を払拭するために、木造住宅の安心感というものをしっかり伝えていく必要がある」との発言があった。

また、神奈川支部からは、横浜市・川崎市と協力して、小学生の森林体験を実施しているが、『木を切るのは環境破壊である』という偏見は教育の場で子供たちに接する先生方の中でも強いようである。そこで「丹沢での伐採作業に参加していただくことで理解促進を行っている」との報告

があった。

このほか、北海道支部、東北支部、静岡県支部、中部支部、近畿支部、中国支部、四国支部、九州支部からも、地域特性を踏まえた地元木材・国産木材への利用促進や、木造の良さをわかりやすく伝える情報発信の重要性が語られた。

これらを受けて、市川会長は「一つの企業だけではなく活動できないことも、木住協としてまとまって参加することで取り組めることも多い。また、行政との連携でも、木住協という団体を通すことで信頼が得られやすい。今後とも、各支部さらに会員企業との相互の関係を深めていきたい」と語られた。

懇談会の閉会にあたって、本部事務局より「今回の意見交換を踏まえて、来年度の各支部の活動計画において『木の良さ・木造の良さ』の理解促進のためのセミナー、視察、見学会等の開催をぜひ企画していただきたい」との要請があり、さらに各支部(支部長・幹事等)との意見交換会を順次継続的に行之、新設された「研修企画委員会」を通して支部活動を全面的にバックアップしていきたいとの方針が伝えられた。



左から加藤専務理事、市川会長、梅木運営委員長



左から西事務局長(中国)、小川支部長(四国)、脇山支部長(九州)



左から竹中支部長(北陸)、江井支部長(静岡県)、中村支部長(中部)、高田支部長(近畿)



左から中本支部長(北海道)、霧井支部長(東北)、宮代支部長代理(神奈川)

木住協が初主催！ 「登録建築大工基幹技能者講習」を開催

木住協は2024年10月13、14日の両日、埼玉県越谷市レイクタウンの「ポラス建築技術訓練校」にて「登録建築大工基幹技能者講習」を開催。「講習実施幹事団体」として木住協が取り仕切り開催する初めての技能講習となった。

「登録建築大工技能者講習」とは、平成20年1月に建設業法施工規則の「登録基幹技能者制度」に基づくもので、国土交通大臣の認可を受けた機関が実施する講習。講習を修了した施工技能者は、「登録基幹技能者」として認められ、国・地方公共団体などが発注する公共事業を直接請け負う企

業が、必ず受けなければならない「経営事項審査」においても、評価の対象となる。

また、登録基幹技能者（講習修了者）は、「建設キャリアアップシステム（CCUS）」のレベル4（最高ランク・ゴールドカード）の取得要件が与えられ、高度なマネージメント能力を有する技術者として認められる。

受講条件には、①実務経験10年以上、②職長経験3年



研修センターの外観

以上、③「一級建築大工技能士」または「一・二級建築士」、「枠組壁建築技能士」、「一・二級施工管理技士」、「プレハブ建築マイスター」などのいずれかの有資格者という高いハードルが設定されており、当資格を有することが、業界においての実力を表す。

講習会当日は、25名が2日間にわたり、建築大工に関連する「基幹建築大工技能者の在り方・役割・安全・品質・コスト・工程管理・コンプライアンス・教育等々」の

様々な講義を受講。受講者は皆、大変真面目。資格取得に向け意欲的に講義に臨むなど、意識の高さがうかがえた。

今回の講習会は木住協初の主催での開催であり、準備・進行など戸惑いもある中、受講者の熱意にうたれスタッフ・講師のモチベーションも高く、無事、初の講習会をやりとげた。

木住協は、今後も基幹大工講習を定例化させ、業界発展に貢献していく考えだ。



研修室。この会場で2日間講習が行われた

研修見学会

今回中国支部の初の試みとして2024年10月2日中国木材株式会社(以降中国木材)の工場見学研修を行いました。

同社は1953年5月1日創業、1955年1月20日に設立。製紙用パルプの原料となる木材チップの製造・販売を主な事業として創業。1960年代に入り、木材チップは国産よりも大型船による輸入が主流となったことを契機に製材業へ参入。港湾型の大型製材業として発展した。本社工場は広島県呉市にあり従業員は2,813名(2024年6月末)。東北から九州まで全国14か所の事業所がある。日本国内に現在約10,804ha(2023年9月時点)の森林を保有している。米国産材と国産材の製材事業を核として、「ドライ・ビーム」を主力とする乾燥材、集成材の製造、プレカット加工、端材の活用事業、バイオマス発電、山林管理、育苗事業までを手掛ける、木造住宅用構造材のメーカーである。

1. 中国木材株式会社 北広島工場

午前中は広島県の県北、山県郡北広島町にある、中国木材・北広島工場を訪れました。

ここで、北広島工場課長の山田様と主任の尺田様より説明をして頂いた。敷地面積は約24,700㎡で年間約53,775立米の生産量がある。敷地内には原木がうずたかく積み上げられており壮観でした。

同敷地にはひろしま木材事業協同組合も同居し、山林で産出される原木を、直材から曲がり材などの低質材まで、多岐にわたるグレードを受け入れています。最新鋭の設備で根張りカット・皮剥ぎののちに選別するなど、品質ニーズにあった原木流通を効率良く実現させることを目

的とし、中国木材と地元の森林組合などにより2009年3月に設立されました。

木材出荷施設で選別された県産(広島県7割から8割、その他を島根県などの近隣から仕入れ)のスギ・ヒノキの丸太を中国木材が買い取り、製材加工機により、各種製品・集成材用ラミナなどの生産を行っています。生産されたラミナ材は呉市の郷原工場へ運搬され、乾燥などの工程をへて、ペイマツと組み合わせたハイブリッドビーム(異樹種集成材)などを生産しています。ハイブリッドビームとはスギの長所とペイマツの長所を組み合わせた集成材で曲げ応力負担の大きい外層部には強くてたわみにくいペイマツ、



北広島工場の作業風景①



北広島工場の台車



北広島工場の作業風景②

内層部には軽くて粘り強いスギを使用した軽くて強いのが特徴で異樹種集成材として、初めてJAS認証を取得しています。

製材工場棟では、ツイン台車にて皮剥ぎ後の原木カットを帯鋸にて製材されていました。

歩留りよくカットするために女性オペレータの方が手際よく操作されている姿が印象的でした。

北広島工場では、伐採した原木からの製材品を余すことなく使い切られており、県産材の利用拡大に注力されていました。これは環境に配慮した取り組みの一つだと感銘を受けました。

2. 中国木材株式会社 本社工場

午後、広島県呉市にある中国木材株式会社・本社工場へ到着。最初に当支部の支部長でもある堀川智子様と、営業部本社営業推進課係長の新谷様より同社の事業内容や業界の現状等についてご説明頂きました。

事務所の屋上からの眺めは、北米から到着した原木船が停泊しており、広大な敷地を見渡すことができます。一度に約3万5千～4万立米を積載する大型船でベイマツ原木を直輸入しており、大量輸送の効率を最大限に活かすため、北米と同社の製材工場を直結する一港積み、一港降ろしという輸送体制が築かれています。国内の製品輸送も船舶での輸送をベースにすることで製品当たりの輸送エネルギーを抑え、環境負荷とコストの低減に努められています。

本社工場は敷地面積が231,500㎡で日本最大の生産能力を誇る製材工場です。ここではベイマツの原木のみを製材しており、月間13万立米を超える原木が投入され、製品となっています。ベイマツはその特性から古くから住宅用構造材などに活用されている樹種です。

同社では国産材の供給拡大にも取り組まれています。現在、全国6拠点にて国産材の製材を行っており、なかでも同社の宮崎県の日向工場と、秋田県の能代工場は国内最大規模です。

また、国内には手入れされていない山林が多く存在しています。そのため、自社で山林を取得し、山林資源の管理も行っています。

持続可能な林業のためには、山林の伐採後に植林が重要ですが、必要な苗が不足しがちであることから、種苗事業への取り組みも開始されているとのこと。環境問題への配慮や、ウッドショック等の影響により国産材の活用が見直されており、同社の取り組みが地球環境保全に貢献され

ていることが理解できました。

その他にもホームセンターなどで買える新しい商品として、純国産杉の無垢材「カフェ板」などのDIYやリノベーション用の素材も展開されています。間伐材を活用した、ムク・ボードや、乾燥材生産の「桧木」を素材としたDLTボードなど、建築用途だけでなく、日常生活のあらゆるシーンに国産材が活用できるような商品開発に取り組まれています。

30か月連続で着工棟数が減少してる中、「木の価値」をあげるために様々な取り組みをされている同社。今回の研修で日本の山林が抱えている問題、原木から製材まで安定的な供給・品質・価格を提供することに注力されていること。バイオマス発電所を工場に併設し、無駄な輸送の排除とエネルギー効率の観点からも、資源の有効活用をされていることが理解できました。

工場で働く方、事務所で働く方皆さまから快く歓迎いただき、非常に有意義な一日となりました。ありがとうございました。



原木船からの積み降ろしの様子



支部長就任のご挨拶

伝統に学びつつ、 木造住宅の新たな展開も



南海不動産株式会社
常務取締役 高田幸男

この度、近畿支部支部長を拝命いたしました。私は1989年に南海電気鉄道株式会社に入社以来、ずっと不動産分野に携わってまいりましたが、大型ビル物件などの賃貸部門が長く、3年前に南海不動産株式会社に常務取締役として出向してきて初めて木住協に関わらせていただきました。その時に強く感じたのは、木造建築の耐火、耐震性など技術力の向上が目まじしいということでした。

SDGsなど環境問題や少子高齢化対策が叫ばれる中、木の地産地消や小規模で住みやすい木造住宅の開発からコミュニティづくりまで、今後、木造住宅産業に期待されるものは大きいと思います。近畿支部では年に5回の研修見学会や特別講演会などを通して、伝統的な木造建築はもちろんのこと、最新の木造技術の展開にも素早く焦点を当てていきたいと考えております。

また近畿支部活動は多様な業種が交流できる貴重な場であり、私が知る限り最も団結力の強い、和気あいあいとした雰囲気にあふれた団体であると感じております。今後もこの良き伝統を大切に、共に学び合い支え合って、厳しいと言われる戸建て分野を発展させていきたいと思います。

資材・技術委員会主催 伝統的建築物の研修見学開催 びわ湖材で林業と建築を繋ぐ取り組みと 江戸時代の宿場町・水口町を訪ねて

近畿支部では9月13日(金)に滋賀県大津市・甲賀市への研修見学会を実施しました。真夏の熱気そのままの暑い一日でしたが、会員各社から26名が参加しました。まず訪問したのは構造材全てにびわ湖材を活用した「滋賀県林業会館」。午後は江戸時代に京都、江戸、伊勢をつなぐ東海道の交通の要衝として栄えた水口宿の宿場町をボランティアガイドによる案内で見学・散策しました。県産材の利用、江戸時代の街並みという二つの木造建築を学ぶ一日となりました。

「滋賀県林業会館」 びわ湖材の流通材を使った ローコストな非住宅実例

滋賀県森林組合連合会の発注により、2021年4月に竣工した「滋賀県林業会館」は、公募型プロポーザルを実施し、坂田工務店・宮村太設計工房共同企業体が選ばれました。提案の骨子となったのは「滋賀県の林業と建築をつなぐ架け橋となる施設」ということで、今回は設計を担当された宮村太氏から特別講義の機会をいただきました。

建物の骨組みとなる構造部材には、全てびわ湖材が使用されました。一般に流通する原木からとれる製材品を利用し、6間スパンを支える多角形アーチ構造(2階大会議室)、3間スパン2階床組架構、レシプロカル構造という3つの木造架構形式を組み合わせ、住宅建設の延長という考え方により良質な非住宅建物を予算内で実現。コスト課題をクリアしました。そ



大会議室の多角形アーチ構造はいずれも材長4m材を用いて継手を設け、木材を折れ線状につなげた(3 ヒンジ式折線アーチ構造)。伝統的な構造要素である貫を構造の一部に採用することで、大工の手刻みの技術を生かした木組みとした。

の一方で、びわ湖材の特徴と流通事情を踏まえた木造架構と意匠デザインを実現するため、宮村氏が木材コーディネーターとなって県内2か所の木材市と9つの森林組合をヒアリング。木材利用・調達方針を立て、構造設計者、製材所と連携することで、県内森林組合の供給可能な製品も利用し、生産現場に過度な負荷をかけない調達を実現しました。このような綿密な調査・連携により、一般流通材を基本部材としながら、今後生産が見込まれる大径材の利用も視野に入れた設計が実現。びわ湖材を活用した設計・建築の好例となりました。



1階事務室。レシプロカル構造の床組を現しとしました。部材同士の接合は市販品の梁受け金物を使用し、プレカット加工で対応可能な形状。

滋賀県は面積の60%が森林で、スギ・ヒノキを中心とした県産材の生産は近年増加傾向にあります。また、今年6月には県内8つの森林組合のうち6つが合併し、新たに「滋賀県森林組合」が設立され、経営基盤の強化が図られました。

滋賀県は面積の60%が森林で、スギ・ヒノキを中心とした県産材の生産は近年増加傾向にあります。また、今年6月には県内8つの森林組合のうち6つが合併し、新たに「滋賀県森林組合」が設立され、経営基盤の強化が図られました。

そのようなタイミングで、滋賀県林業会館を訪れた参加者たちは宮村氏の解説に聞き入り、びわ湖材の魅力と可能性、コストと材料の相関、林業・製材のこれからについて、各社各様に学びに満ちた時間となりました。



ピロティの4間スパン7.28mを支えるレシプロカル構造(格子梁)。加工は所定の長さに切るだけ、部材同士の接合はビス留めにし、所定の間隔、法則で並べた施工方法。

滋賀県で製材されている広葉樹33種を使用したコラージュ壁面。見るだけでなく触れることもできるようにすることで、仕上がりがわかりやすいようにした。



びわ湖材の展示空間として完成した「滋賀県林業会館」。延床面積 501.61㎡(1階272.22㎡、2階229.39㎡)、建物工事費 1億2,500万円。

「東海道五十三次・水口宿」 紡錘形の三筋町、宿場町の栄華が香る 400年の歴史の中に人々が暮らす街

滋賀県南東部に広がる甲賀市は、2004年に旧甲賀郡の5町(信楽町、甲南町、水口町、甲賀町、土山町)が合併し甲賀市になりました。その一つ、水口町が今回の訪問地。歴史は古く、江戸時代の慶長6年(1601年)、関ヶ原合戦で覇権を握った徳川家康が東海道の整備を行った際に、水口も宿駅に指定されました。江戸、京、伊勢をつなぐ東海道の宿場町として将軍家の通行も頻繁で、3代将軍家光公上洛時の宿館として古城山に水口城が築かれ城下町としても栄え、最盛期には「街道一の人とめ場」と言われたそうです。水口町の名物はかんぴょう。江



ボランティアガイドさんの案内で2班に分かれて街を見学する参加者たち。400年前に作られた三筋町の形状は今もそのまま生かされている。

江戸時代の浮世絵師、歌川広重の『東海道五十三次・水口』にも夏の風物詩として宿場町を背景にかんぴょうを干す風景が描かれました。この水口宿をボランティアガイドの案内で散策しました。

水口宿を象徴するものは、三筋町と呼ばれる紡錘形の三筋の街並みです。古城山と野洲川に挟まれた地形から、平地を生かした紡錘形になったと言われています。街が形成されてから400年以上。江戸時代中期に描かれた「水口宿色絵図」を見ても、その形状は今も変わらず、当時からある建物や看板、井戸、石碑などがそのままに現在の生活風景に溶け込んでいました。

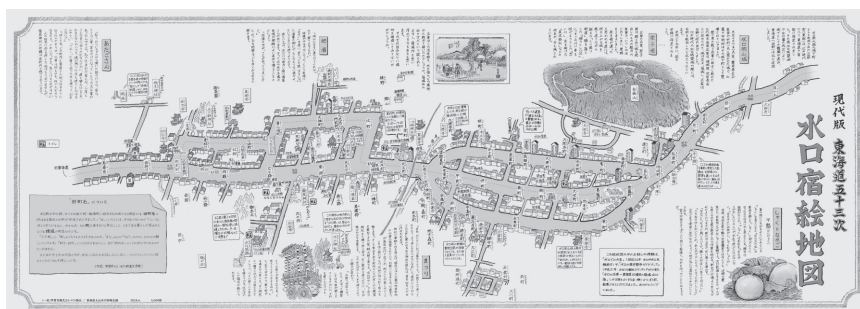
文久2年(1862年)には、町屋屋敷総数746あり、本陣1、脇本陣1、旅籠46、商家251、曳山蔵18があった



旅籠にかけられていた看板が現在の住宅にそのまま残されている。この看板を目印に人々は宿泊するところを決めていたという。



1917年創業の老舗の酒蔵「美富久酒造」



江戸時代中期に描かれた「水口宿色絵図」と街のつくりが変わらないことがよくわかる現在の「水口宿絵図」(甲賀市観光まちづくり協会/東海道土山水口宿場会議)



江戸時代に「お達し」が公示されていた高札場(こうさつば)跡。街の中心のひとめにつきやすいように三筋町の2箇所に設置されていた。

とされています。その豊かな宿場町には文化の花も開き、水口神社の祭礼「宵宮祭」「例大祭」では今も壮麗な神輿を見ることができ、江戸由来のリズムを持つ「水口ばやし」が奏でられています。現在、維持管理されている16基の神輿のうちのひとつが毎年交代で甲賀市水口歴史民族資料館に展示されていて、この神輿を間近に見ることができました。決して派手な観光地ではない水口町ですが、400年の歴史の上に現在の人々の暮らしがあることを歩きながら見て感じ、人々の話から知ることができました。最後は1917年創業の老舗の酒蔵「美富久酒造」で酒蔵を見学しながら涼み、熱気に満ちた見学会が終了しました。



今年は甲賀市水口歴史民族資料館には、河内町の曳山(全巾3.04m、全長4.60m、全高5.4m、車径1.38m)が飾られている。細部まで美しい彫刻が施されている。

2024年度「第1回商品・技術勉強会」 開催レポート

開催日程: 令和6年9月19日(木)

開催場所: 株式会社LIXIL

INAXライブミュージアム

愛知県常滑市奥栄町1-130

日本木造住宅産業協会中部支部は、資材流通委員長の村井洋介氏と技術開発委員長の上野智弘氏の下、「第1回商品・技術勉強会」を開催しました。

名古屋駅構内の銀の時計前を出発地とし、19名の会員が参加。貸し切りバスで愛知県常滑市にある㈱LIXILの「INAXライブミュージアム」へと向かいました。

INAXライブミュージアムは、愛知県常滑市にある陶磁器に関する博物館です。INAXとは、日本の大手住宅設備メーカーであるLIXILグループの一つで、特にタイルや衛生陶器などで知られています。



「窯のある広場・資料館」前で土管の説明を受ける

INAXライブミュージアムは、INAXの創業地である常滑市に位置し、陶磁器の歴史や製法、その美しさや魅力を深く学べる場所となっています。ここでは、古代から現代までの陶磁器の歴史や、世界各地のタイルの展示、実際に陶磁器を作る体験学習などができます。

また、日本の伝統的な建築やタイル作りの技術を学ぶことができる施設や、現代のタイルデザインを展示するギャラリーもあります。さらに、INAXの最新の製品を展示・販売しているショールームも併設されています。

昼食後に専属のガイドの方に案内していただき、各施設の詳細な説明を聞く機会に恵まれました。

ガイドの方が熱心に説明をしてくださったおかげで、私たち会員は、陶磁器やタイルの深い歴史とその美しさに触れることができました。さらに、その中から新たな発見やインスピレーションを得ることができ、それが次の創造活動につながることを期待しています。

「窯のある広場・資料館」

大正時代に建造された土管工場の大きな窯と建屋、煙突を保存・公開しています。大正から昭和40年代にかけて隆盛した常滑の土管産業の様子を今に伝える資料館です。

「建築陶器のはじまり館」

大正から昭和初期、新しい時代の建物が次々と建てられ、「建築陶器」と呼ばれるやきもの製のタイルとテラコッタがその外壁を飾りました。明治時代の初期のものから1930年前後の全盛期に至る、日本を代表する芸術性の高いテラコッタを展示しています。

「世界のタイル博物館」

紀元前から近代まで、世界の装飾タイル7000点以上を収蔵。タイルの歴史や文化を研究すると共に、さまざまな展示を通してその魅力を伝えるタイルの専門博物館です。

私たちが訪れた各施設だけでなく、INAXライブミュージアムにはさらに多くの魅力的な展示があります。そして、この博物館は一般公開されており、普段から誰でも気軽に訪れてその歴史や美しさに触れることができます。



「建築陶器のはじまり館」で、タイルの説明を受ける

今回の訪問に参加できなかった会員の皆様も、もしINAXの陶器の歴史に興味を持たれた方は、ぜひ一度足を運んでみてください。その深い歴史と美しさが、新たなインスピレーションを与えてくれるかもしれません。



「世界のタイル博物館」での集合写真

2024年度「視察研修旅行」 開催レポート1日目

開催日程: 令和6年10月3日～5日

開催場所: 北海道

日本木造住宅産業協会中部支部は、毎年恒例となっている「視察研修旅行」を今年度も開催いたしました。

この活動は、我々会員同士の交流を深めると同時に、全国の木造建築や工場の現況を直に視察し、新たな技術や知識の習得を目指すものです。

初日には、北海道の美しい港町、小樽市を視察しました。市内では、独特の風格を持つ歴史的建築群を視察しました。特に、レトロな雰囲気が魅力の運河周辺の倉庫群は、かつての繁栄を感じさせ、これらの建物は、建築の素晴らしさを改めて認識させてくれました。

その後、「小樽貴賓館」と「にしん御殿(旧青山別邸)」への視察を行いました。

「小樽貴賓館」と「にしん御殿(旧青山別邸)」は、北海道



「小樽貴賓館」前での集合写真

小樽市に位置する二つの歴史的建築物であり、それぞれが異なる特徴と美しさを持つ豪華な建築物です。

まず、小樽貴賓館は1907年に建設された、西洋と日本の建築様式が見事に融合した建築物です。ジョサイア・コンドルというイギリス人建築家による設計で、レトロかつ

洗練された外観が特徴的です。白と紺のコントラストが特徴的な外壁は、大正口マンを彷彿とさせます。内部は豪華な装飾が施されており、壁画や天井画、ステンドグラスなどが鑑賞のポイントです。また、日本の伝統的な要素も取り入れられており、畳の間や日本庭園も配されています。このような西洋と東洋の文化の融合は、訪れる人々に独特の雰囲気を提供します。小樽貴賓館はその美しい建築様式と歴史的価値から、国の登録有形文化財に指定されています。

一方、にしん御殿 旧青山別邸は、日本初の百貨店として知られる「丸井今井」の創業者である青山財閥の別邸として1923年に建てられました。その美しさと豪華さから「にしん御殿」とも呼ばれています。外観はクラシックでレトロな雰囲気を醸し出し、白い壁に施された彫刻や装飾、スレート屋根が印象的です。内部はシャンデリアや壁画、ステンドグラスなどにより豪華さが際立ちます。また、青山別邸は海に面して建てられており、各部屋からは絶景を眺めることができます。さらに、暖房設備や給湯設備など、当時の最新技術が取り入れられています。その美しさと歴史的価値から、国の重要文化財に指定されています。

これら二つの建築物は、いずれもその美しさと歴史的価値から訪れる人々を魅了します。そして、その建築様式を通じて、日本の近代化の一面を垣間見ることができます。

次に「札幌時計台」を視察しました。

札幌はもとより北海道観光のシンボルとして全国的に知られる札幌時計台は、正式名称を『旧札幌農学校演武場』と言います。札幌農学校は、近代技術を導入し北海道開拓の指導者を養成する目的で開校したもので、北海道大学の前身としてもよく知られています。

かの有名なクラーク博士は同校の初代教頭として1876(明治9)年に赴任。生徒の心身を鍛える武芸科を設置し、兵式訓練や体育の授業を行うために「武芸練習場」建設の構想を温めながら、志半ばで帰国の途に就きました。2代目教頭のW・ホイラーがその志を継いで演武場の建設を行い、1878(明治11)年10月16日に完成。1階は研究室や講義室などとして使われ、2階は兵式訓練や体育の

授業などに使われました。

その構造は、太い柱を使わず、厚板や半割柱で構成した軽量木造建築です。学校の建物らしく簡素で実用的な造りにはバルーン・フレームの特徴が多く見られ、特に2階ホールは仕切りのない大空間(約375平米)で、従来の軸組工法では成し得ない枠組工法ならではの広さといえます。

1906年に農学校は、札幌市の所有となり、曳屋で現在地に移転。その後、郵便局、教育会館、図書館として利用され、1970年に重要文化財となりました。これまで6度の改修や修理を経て、2024年10月にはなんと築146年を迎えます。

北海道の厳しい自然環境に耐え、幾多の災害の危機を乗り越えてきた札幌時計台。まさに我が国のツーバイフォーの歴史に最初の1ページを記し、「200年住宅」の先鞭をつけた偉大な建物の一つといえるでしょう。時計台は、「開拓使時代の洋風建築」として「北海道遺産」に選定されています。

「視察研修旅行」の1日目、小樽市内の歴史的建造物群、小樽貴賓館、にしん御殿(旧青山別邸)、札幌時計台の視察を終えまして、これらの建築物は、それぞれが異なる歴史と文化を持ち、その美しさは訪れる者に深く響き渡る感動を与えてくれました。北海道のこの3つの建築物を訪れたことで、その土地の歴史や文化をより深く理解することができました。

これらの建築物は、その場所の魅力を引き立て、訪れる人々に素晴らしい体験を提供してくれます。1日目の視察は、その事実を改めて教えてくれました。



「札幌時計台」の建物の中で説明を聞く



「札幌時計台」前での集合写真

新規会員紹介

2024年7月から10月までに入会されました企業を紹介します。みなさん、よろしくお願いします。

(一社)MEAS

賛助会員

代表理事 田中 俊行

住まいの長期保証(初期20年/最長60年)のご支援をはじめ、皆さまが抱える課題と一緒に解決していきます。

〒104-0042 東京都中央区入船2-2-2

PMO八丁堀V11階

TEL: 03-3527-3166 FAX: 03-3527-3167

<https://www.meas.or.jp>

タニサキ住建

3種正会員

代表 谷崎 徹也

ゆたかなくらしと家族のぬくもりを提供する為に住宅の設計・施工を目指します。

〒937-0041 富山県魚津市吉島1168-1

TEL: 0765-22-4845 FAX: 0765-33-4030

<http://www.tanisaki-j.jp>

(株)LAD

3種正会員

代表取締役 高山 禎章

私たちは「子×食×住」のコンセプトを掲げ「子どもたちの未来を創造」する企業を目指しております。

〒333-0801 埼玉県川口市東川口3-7-33

コットンキャンディー東川口1階3号棟

TEL: 048-287-3037 FAX: 048-420-9537

<https://lad-walkthelife.studio.site>

三省堂印刷(株)

賛助会員

代表取締役 関田 敏之

三省堂の辞書作りから始まり、学習書からコミックに至るまでの幅広い範囲の書籍製作を行っています。

〒171-0014 東京都豊島区池袋2-63-7

エイチケイグラフィックスビル2階

TEL: 03-5944-9602 FAX: 03-5944-9608

<https://www.sanseido-prtg.co.jp>

(株)いのうえ工務店

1種B正会員

代表取締役社長 井上 敏

親子3代で100年以上に渡って天然木の家をつくり続けている、こだわりの住宅会社です。

〒362-0001 埼玉県上尾市上20-11

TEL: 048-783-4578 FAX: 048-729-5788

<https://www.irodori-house.jp>

コーナン建設(株)

1種A正会員

代表取締役 原 恭平

コーナン建設は、関西圏と首都圏を基盤とする総合建設企業(ゼネコン)です。2021年から住友林業グループの一員としてRC造、鉄骨造に加え木造にも取り組んでいます。

〒531-0075 大阪府大阪市北区大淀南1-9-10

TEL: 06-6456-4311 FAX: 06-6456-4835

<https://www.cohnan.co.jp/>

(有)中勝建設

1種C正会員

代表取締役 中野 貴文

小さい会社だからこそお客様に寄り添った設計、施工を心掛け、また職人技の必要なりフォームも得意としています。

〒771-1252 徳島県板野郡藍住町矢上北分11-14

TEL: 088-693-3511 FAX: 088-693-3511

(株)住生活研究所

1種B正会員

代表取締役社長 深澤 哲明

全国フランチャイズ展開中のクレバリーホーム加盟店です。木造注文住宅の設計、建築工事請負を行っております。

〒511-0863 三重県桑名市新西方7-12

TEL: 0594-25-8557 FAX: 0594-25-8558

<https://ch-juseikatsu.com/>

(一社)日本擁壁保証協会

賛助会員

代表理事 中原 隆

業界初。擁壁を診断し、安心して、長期間使い続けるという新たな選択肢をご提供いたします。

〒105-0013 東京都港区浜松町1-2-1

NOR浜松町9階

TEL: 03-5817-8487 FAX: 03-5817-8497

<https://youheki.or.jp>

塚本産業(株)

1種B正会員

代表取締役社長 桜井 幹也

栃木材を使った家づくりをしています。地域に根差した工務店になります。

〒321-4305 栃木県真岡市荒町57-18

TEL: 0285-82-3301 FAX: 0285-83-3106

<https://www.tsuka-ie.com/>



〈長崎県長崎市〉

東山手十二番館

「東山手十二番館」は、明治元(1868)年に建設された初期洋風建築の代表例で、外国人居留地であった東山手地区に現存する最古の遺構である。

オランダ坂の上に建つクリーム色のオシャレな洋館で、長崎港を眺望できる幅広いベランダが特徴的である。当初はアメリカ人商人ウォルシュの邸宅として建築が始められたが、すぐにロシア領事館となり、その後、アメリカ領事館、メソジスト派の宣教師の住宅として使用され、戦中から戦後にかけては学校法人活水学院の施設となっている。

主屋と附属屋からなる堂々たる構えで、主屋は正面中央に幅の広い廊下、ゆったりとした間取りの三つの大部屋があり、領事館時代には客間や事務室として使われていた。附属屋は主屋に比べ間取りが狭く、領事館員の居住スペースとして使われていた。

外壁は主屋・附属屋とも下見板張りで、国内で最古の事例といわれている。内装は漆喰による仕上げで、全面吹放ちとした床下の造りも珍しい。また、西側正面にある三面に及ぶ幅広いベランダでは、ベランダ列柱の上部に付く円弧形の削り抜き装飾をもつ板状の持送りが印象的である。

昭和51(1976)年に長崎市に寄贈され、現在は「旧居留地私学歴史資料館」として利用されている。

東山手十二番館 国指定重要文化財

建 築	明治元年(1868年)
所 在 地	〒850-0911 長崎県長崎市東山手町3-7
電 話	095-827-2422
入 館 料	無料
休 館 日	12月29日～1月3日
開館時間	午前9時～午後5時
所有管理	長崎市

<https://www.mokujukyo.or.jp>



一般社団法人

日本木造住宅産業協会



木 芽

2024年11月20日発行

Vol.190

発行人 加藤 永

編集 業務・広報部

〒106-0032 東京都港区六本木1-7-27 全特六本木ビル WEST棟2階

電 話 03(5114)3010(代) FAX 03(5114)3020